
黒き征裁

い～ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒き征裁

【Nコード】

N7984A

【作者名】

いーちゃん

【あらすじ】

世界中が戦争中！！！そんな世界に生まれた少年が仲間と共に成長していくファンタジー！！！知られざる漣亮の過去とは？『元チーム』との対決は？？とにかく読まなきゃ損！！！今すぐこの世界に旅立とう！！！！

プロローグ（前書き）

少しでも興味を持って下さった方に感謝します。

初めての小説ですので我が子を見守る様な気持ちで読んで下されば幸いです。

最後までよろしくお願いします。

ブローグ

この世界は汚れている。

完全なる弱肉強食の世界だ。

その風習は学校教育の場にもおよんでいる。

戦争で勝つ為に、人を殺す為に………その為に俺達は学校で戦う技術を学んでいるのだ。

もちろんこんな世界が嫌じゃない訳じゃない。

こんな世界は嫌いだ。

だからと言ってたかが1人の高校生が騒いだところで何も変わりやしない。

俺はそんな建設的じゃない事はしない。

人の人生なんてたった100年だ。

今は戦争のおかげで平均寿命が男女共に30代だ。

あと20年もない人生なんざの為に頑張って生きて行こうなどとも思わない。

あと少しだけ…我慢するでしょう。

第1話：転校生

西院学園……今日、俺が転校する学校の名前だ。

ちなみに今日の朝は俺の17年の人生な中でたぶん4番目ぐらいに悪かった。

昨日、夜遅くまで引越して来たばかりのアパートにあった荷物の整理をしていたせいだ。

転校ギリギリに引越するもんじゃないって事が今日わかった。今さら言っても仕方ない事を頭の中で思いながら俺は歩いていた。学校まで片道15分、ちなみに今は8時15分、まあ走ったところで間に合う訳じゃない。

転校初日に遅刻と言う漫画の世界の出来事のようなイベントを成し遂げた俺の名前は……、それはまあもう少し後からにしよう。

結局、学校に着いたのは8時30分だった。

けっこは歩きしたんだけどな……。

職員室で生活指導の教員とたまたま授業のなかった学年主任に怒られた後、俺は教室に向かった。

後ろのドアから入ると……まあ決まりのパターンだ。

ちよと担任の授業だった様で今から朝学活にやるはずだった俺の自己紹介をする事になった。

「今日、転校して来た漣なみなみ亮です。えーと、まあよろしく。」

いたって普通、常識的かつ善良な挨拶だ。

好意的な視線とそうじゃない視線とがいりまじった視線が俺に向けられる。

「じゃあ漣くんはあその席に座ってくれ??」

と右から2番目の後ろの席を指示す。

普通は転校生と初めて隣に座った可愛い女の子が恋に落ちるって言うお決まりなストーリーがあるはずなんだけど、残念な事に両隣共

に男だったのでそのストーリーはカットだからよろしく。

第2話：友達

転校初日という事で午前中は大した会話もなく過ごした。
本当はこの雰囲気嫌いなだけだな…。

食堂に行けば誰かと知り合いになれるだろうと思いき食堂に行く為に立とうとすると、離れた所からなんとも愉快的な会話が聞こえて来た。
「漣、だっただっけ…誘ってみようぜ。」

「あいつなかなかカッコいいから仲良くなって女の子と知り合いになろうって魂胆だろ??」

「ばっ、違うぞ!!!」

「本当に違うなら食堂に案内してもらいたいんだけど。」
こっちから話かけてやった。

この雰囲気を脱出する為にいつかは必要な行為だったしちょうどいいきっかけになった。

「あ、聞こえてた??冗談だよ。冗談。」

と髪を茶色に染めている方の男子生徒は笑いながら自己紹介をした。

「俺は安永順一郎。順って読んでくれ。まあよろしくな。」

「俺は上坂拓也。何て読んでくれても構わないぜ。よろしく。」

と隣にいた落ち着いた雰囲気の男子生徒も自己紹介をする。

この話の流れでは俺も自己紹介しなきゃなんねーよなあ。

「漣だ。亮でいいぜ。」

まあ簡潔に……。

「で、案内してくれんのか??」

「喜んで。食堂だけじゃなくて女子トイレから女子更衣室までなんなりとお申し付け下され。」

「じゃあまずは女子更衣室かな??」

「お!!旦那、いいチョイスではございませんか。」

いろいろ思う事があるかもしれないけど突っ込み禁止。

「それより早く行かないと席なくなるぜ??」

と拓也の現実的な一言で俺達は食堂に行く事にした。
女子更衣室はまた今度案内してもらおうとでもするかな。

第3話：食堂

食堂は共同施設にあるので男子だけじゃなく女子もいた。

今は拓也と円卓のテーブルに座ってジャンケンで負けた順が3人分の食べ物を買に行ってる最中だった。

「そう言えば前はどこの学校に行ってたんだ??」

「学校は行ってなかったんだ。放浪の旅ってやつ??」

まあ格好よく言ってみたが実際はそんな格好いいものじゃないけどな。

「よく編入できたなあ。すげーじゃん。」

「だろ?? やっぱり拓也は話がわかるなあ。」

実際は西院の理事長が俺の知り合いだっただけだから編入試験とか1つも受けてないけど。

「けっ!! 気取ってんじゃないよ。」

と3人分の食べ物を持ってご機嫌斜めな順が帰ってきた。

「絶対俺の方が強えぞ。」

「拓也と順は学園でどんくらいの位置にいるんだよ??」

スルーしてやった。

「中の上ってとこかな?? 学年じゃ上の中かな??」

「へえー。けっこついいポジション取ってるじゃねーか。」

「男子だけだけどなあ。」

と順がつぶやく。

「女子が入れば何か変わるのか??」

「上も下も倍になるくらいかな??」

「まだ俺達も正式にはわかんねえんだよ。」

口に物を詰めこんで喋るな。

「来週だったかな?? 学年序列を決める大会があつたはずだからそれでわかる。」

学年序列か…。

目立ち過ぎるのもよくないし弱すぎるつてもよくないからな。
拓也より下はまだいいが順より下は許せない気がする。

とまあ転校初日の昼休みはこれで終わった。

午後からはクラスのほとんどの生徒と打ち解けたみたいだし初日に
しちや上出来だろう。

俺って対応能力抜群だなあ。なんて思いながら帰路に着くかな。

第4話：女子練

それからの数日は何事もなく実に充実していた。
ただ1つ足りないものと言えば女の子ぐらいだ。

男子練だから当然と言えば当然だが全く華がない。

周りの情報によると拓也にはかなり可愛い彼女がいるらしい。
裏切られた気分だ。

今までに女に困ることがなかったから（皮肉じゃねえぞ）こう言う
時にどう対応すればいいのか困る。

って事でお待ちかねの女子練案内を今日してくれるらしい。

放課後になり順以下約10人で俺を案内してくれるらしい。

………そんなにいらねーよ。

放課後になり安永順一郎プレゼンツ女子練案内ツアーを行う時間にな
った。

ちなみに女子練は男子練のの向かい側にある。

きちんと許可を取ってあるのかとか入って行ってもいい事になっ
ているのかと言う不安は絶えなかったがまあ気にしないでおう。

「えーそれでは今をもちまして女子練に侵入いたします。」

「早くしろよ。」

「ばか!!やらせろよ。」

と文句を言いつつも順は女子練に入って行つた。

「えー、ここが2年女子の教室がある3階でございます。」

「知ってるよ。」

と俺以外の皆が言う。

「俺の為の案内なんだから我慢しとけよ。」

「そう言えばそうだったな。」

って言うか忘れんなよ。

「あれ??安永??何してるの??」

と、突然に後ろから声がかかった。

「よう。亮を……転校生を案内してるんだよ。」

「転校生?? あっ!! その言えば拓也が言ってた。」

「誰だよ??」

俺はたまらず順に聞いてみた。

「あっ!! 拓也の彼女の奈々原朋美です。よろしくね」

「漣亮です。よろしく。」

つてか拓也の彼女かよ。可愛いじゃね〜かちくしょう。

「漣くんって女子練でも結構噂になってるんだよ?? カッコいい転校生が来たって。」

「マジで?? それは光栄だなあ。」

「……………」

後ろからかなり危うい視線を感じるけど無視しとくか……………やっぱり無理だ。

「何だよ??」

「…そろそろ時間がないし帰るぞ。」

またご機嫌斜めな順一郎君でございます。

つて言うか機嫌がコロコロ変わる奴だな。

ご機嫌斜めな順がとつと歩いて行ってしまうのでどうやら俺も急いだ方がいいらしい。

「じゃあまたな?? こんどはゆっくり話そうぜ。」

「うん またね〜。ばいばい。」

今度は前から睨みやがった……。

第5話：衝撃

帰り道にずっと順をなだめておく必要があったが昨日は楽しかった。まあ可愛い女の子とも知り合いにもなれたし：拓也の彼女だけだな。それに比べて今日は朝学校に着いたとたんに本当に本当は女子練に勝手に入ったらダメだとかいろいろ拓也から注意を受けた。

どうやら朋美がしゃべったらしい。

しかも午後からは『靈力テスト』があるらしい。

俺にしてみれば靈力って何だよって感じなんだけどもなあ……。

「ところでさあ。靈力って何だよ？」

と切り出せたのは3時間目が終わってからだった。

「……………」

「何だよその3点リーダー4文字は??」

「…………… 新手のネタ??」

どうやらやっぱり聞かない方がよかったらしい。

「お前ほんとに編入試験受かったのか??」

「でも戦闘学校に行った事ないんじゃない??」

「でもぶっ飛びすぎだろ。」

いろいろ言いやがって。

少しは黙れよ：こっちは軽くショックなんだよ。

って言うか誰か説明してくれませんか!!

「亮：真剣に言ってるんだったら今から職員室行って来いよ。」

そんなにあきれるなって……………。

「俺も行って来た方がいいと思う。」

だからクラス全体で俺をイジめるなよ。

「わかったよ。わかったわかった!! 行って来るよ!!!」

もうヤケクソだ……………。

「何!! 靈力ってなんだだって!??」

お前までお決まりの反応かよ。

担任の井伊に

「靈力って何?？」

って言ったとたんに叫びやがった。

「靈力って言うのはだな……。」

これから靈力テストが始まるまで基礎からみっちり叩き込むらしい。
もうどうにでもなれよ……。

第6話：靈力テスト

5時間目が始まって俺はまだ職員室にいた。

1番初歩的な技はできる様になっただろう。

俺自体は靈力を持つてゐるらしいからきちんと基礎を積みゃ大丈夫らしいけど今日には間に合わないらしい。

やっと解放されたのが5時間目の終わりぐらいだった。

「で、どうだったんだよ??」

冷静に突っ込む拓也の隣に座る。

「1番初歩的なのは使える様になった。」

「初歩的なのはあの手球ぐらいの靈力の塊が出るやつ??」
どうやら順は俺を徹底的にイジメたいらしい。

ニヤニヤ笑ってやがる。

「あゝ!!うるせえな!!靈力なんて知らねえよ!!」

「とうとう現実逃避に走ったな。」

「じゃあ次は2年3組。」

と試験官の先生の声がかかる。

「じゃあ全員頑張つて行こう!!!」

いつか順の奴殺してやるからな。

順番を待っている間はかなり憂鬱だった。

周りから見ればご機嫌斜めの亮君だっただろう。

どんどん試験を終わつた生徒が出てくる。

ちなみに拓也はかなり出来たらしい。

「そろそろ行つて来いよ。」

「ああ。終わつても何も聞くなよ??順にも言つてくれ。」

手を上げて答える拓也を後に俺は壁で区切られた試験室に入つて行

った。

「出席番号39番の漣亮君ですね??まずはそこに座って下さい。」
これが俺の地獄の試験の始まりだった。

それから制御の試験とかコントロールの試験とかいろいろあったが
まあ客観的にみて出来たとは言わないだろう。

って言うかボロボロ……。

結果は帰るまでにわかるらしい。

拓也のおかげで誰にも

「どうだった??」

と聞かれなかったのは不幸中の幸いだった。

その幸いもつかの間、早くも結果発表の時が来た。

早すぎだっつの。

どうやら読み上げて行くらしい。

ちなみに拓也は80順は78だった学年としてはかなり高い方らしい。

「次…漣亮!!……ここで言ってもいいのか??」

みんなの視線が突き刺さる。

「いいっスよ。」

「漣は……21だ。」

「……………」。

教室に気まずい沈黙ができる。

「21は学年最下位だ。」

第7話：雁原優華

昨日、学年最下位の成績を申告されてからは、さすがに順もその話題には触れなかった。

逆に辛えつゝの。

もし自分からそんな方向に話題を持って行くと虚しくなるだけだからしなかった。

来週の学年序列決定トーナメントとか言うのもどうでもよくなってきた。

こんなにブルーになったのは初めてだ……。

ちやっかり家で練習してみたけど、部屋が散らかっただけで何の進歩もなかった。

剣技とかなら自信はあるんだけど、靈力でガードされたらこっちにダメージがはねかえってくるらしい。

マジでブルーだ……。

「今日、拓也が奈々原と一緒に飯食うらしいぜ。」

今、そんな事言われてもよけいにテンション下がるだろうが。

「でさ、奈々原といつも一緒にいる女の子がめちゃくちゃ可愛いんだよ。奈々原より可愛いかな?？」

「……………」

あえてノーコメント。

「俺達も一緒に行かね?？」

「是非行きましょう。」

テンション急上昇。

待ちに待った昼休み。

拓也に付いて行くともうすでに朋美達は来ていた。

「拓也ー!!」

と手を振る朋美の所へ拓也は足を進める。

「あつ！！漣くんじゃん！？」

と朋美の隣にいた女の子が声を上げる。

「ほんとだ。漣くん～！！」

可愛い女の子に手を振られるのは幸せだなあ。

「初めまして。雁原優華です。よろしくね」

……可愛い……なんつって。

「漣亮です。よろしく。」

「亮、順知らね??」

「順??」

つてか自己紹介し終わったばつかなのに邪魔すんなよ。

「安永ならさつきあそこで曲がったよ。それより早く食べよ。」

「そうだな。」

拓也と朋美は俺と優華の事なんかおかまいなく歩いて行く。

「今日もラブラブですねえ。」

「いつもあんななのか??」

「うん。……私達も一緒に食べる??」

「ああ。」

「ええ！！じゃあ漣くんて学校初めてな人なの!??」

なんかマズイ方向に話が進みそうだ。

「じゃあ霊力テスト21点もしかたないね。」

やっぱりかよ。

「つてか何で知ってるんだよ??」

「漣くんは女子練じゃ結構有名なのです。」

「そりあ光栄だなあ。で、優華ちゃんはどうだったんだよ??」

一応『ちゃん』付け。

突っ込み禁止。

「私???私、雁原優華ちゃんはなんと77点だったのです!!」

「マジ???すげーじゃん。」

「わかんない事あったら教えてあげるよ。」

今日の会話はこんな感じだった。

可愛い女の子とも知り合いになれたし今日はいい日だった。

第8話：雑談

昨日、順が消えた訳は

「俺が行ったらハミっただろうが!!!」

って事らしかった。

ナイス判断だな。

俺は帰ってから別に優華の髪がさらさらだとか、鼻筋の通った綺麗な顔を思い浮かべたりはもちろんしてない。

……ちよつとはしたけど…。

まあそのおかげでもうすぐ学年序列決定トーナメントがある事がすっかり忘却の彼方だった。

今さっき嫌味ったらしく順に言われたのでやっと思い出した。

「亮ってトーナメント出れんの??」

「黙れ、安永。」

こんな感じの会話がかなりあった。

どうやら他の男子共も俺がトーナメントで最悪な結果を残すと女子練での俺の噂もなくなるだろうと思っているらしい。

ってかイジメかよッ!!!

「靈力の使い方誰も教えてくれね〜し、優華ちゃんにでも教えてもらおっかなあ。」

って言ったらその瞬間から嫌と言うほど無理矢理に教えてくれたけど。

「亮って剣使うんだよな??」

「ああ。剣技だけじゃ負ける気しないんだけどな。」

「マジで??」

「ああ。試すか??」

「……………」

どうやらみんなで本当か審議してるらしい。

「本当は剣技もだめなんじゃね??」

「じゃあなんで編入できたんだよ??」

「霊力ない分補う剣技あるのかな??」

勝手にいろいろ言いやがって。

「明日って休みなのか??」

唯一審議に参加してない拓也に聞いてみた。

「日曜だからな。トーナメントは月曜からだ。」

まあ日曜日に必死に練習したところで何も変わらないだろうし霊力はあきらめるかな。

「まあ、本番になったらわかる。」

と言うことで審議の結果は決まったらしい。

「1年の時は何位だったんだよ??」

「1年はまだ霊力がまともに使えないからトーナメントないんだよ。」

順が意味ありげな目でこつちを見る。

全くもって不安だ。

何かいい案がないかね。

第9話：日曜日

昨日の終学活でもらったプリントに学年序列決定トーナメントの説明が書いてあった。

男女混合でトーナメントをしていくらしい。

運も関係してくる訳だ。

相手はクジで決めたらしい。

俺の一回戦の相手は『斎藤隆』って奴だった。

霊力テストでは70だったらしい。

クジ運悪ッ!!!

こんなプリント見てもブルーになるだけだからコンビニにでも行く事にした。

もうすぐ梅雨なのにすっげー晴れてる。

「あ...」

って言う声でしたので取り合えず振り向いてみた。

雁原優華がいた。

「漣くんじゃん。ちやお」

「ちやお。」

フランス語...

「何してんの??」

「散歩かな?? 漣くんこそ訓練しなくていいの??」
何気に酷いな。

っつか散歩かよ。

「昼ご飯買いにコンビニにでも行こっかなって。」

「そっか、漣くん1人暮らしだったね。」

なんとなく2人で並んで歩き出す。

「1回戦誰だった??」

「斎藤隆... だったかな?? 霊力70って書いてあった。」

「うわあゝ。漣くんクジ運悪いねえ。」

「知ってんのか??」

「うん。性格悪いので有名だよ。」

マジでクジ運悪いなあ。

日頃の行いはいいハズだ……。

「日頃の行い悪いんじゃない??」

「…………。いいハズ。」

「あはは。自分で言うなよ。」

「優華ちゃんはクジ運よかったのか??」

「うん。まあ普通かな??ヘマしなきゃ勝てる相手。」

「よかったじゃね?か。頑張れよ??」

「漣くんも頑張んなきゃダメでしょ??」

霊力がもつとあれば頑張れるんだけどな。

「剣技はすごいんでしょ??」

その情報源はまた例の噂かよ。

「まあな。でも霊力がなかったらあんま意味ないってさ。」

「ん」。勝つたらご褒美あげるって言ったら頑張る??」

…………。

夢の様な提案です事。

「くれるんなら頑張るよ。」

「じゃあ勝つたら優華って呼ばせてあげる。」

「…………。」

「あつ!!自信過剰とか自意識過剰って思わないでよ??優華って呼ぶ男の子1人もいないんだから。」

自意識過剰だろ……。

ご褒美って言ったらあんな事やこんな事が…………ってそうじゃなくて。

「わかったよ。頑張る。」

「本当??約束だからね」

「はいはい。」

ひよんな事で勝つ約束しちゃった。

…………どうするかな。

第10話：学年序列決定トーナメント1

ついにやって来ました悪魔が作った日。

なんとこの日は晴天です。

ちなみに俺の試合は第3闘技場で3試合目。

拓也は自分の試合で来れないらしいが他のクラスメイトはほとんど来れるらしい。

なんでだよ……。

無観客試合したいんですけど。

1試合目も2試合目もかなり早く終わった。

しかも観客がかなり入ってるんだよ……。

後で知ったけど優華と朋美がいっぱい女子生徒連れて来たらしい。

そして俺は今死刑台……じゃなくて闘技台に上がる13階段……じゃなくて15階段を目の前にしている。

一応策はあるんだけどな。

「両者闘技台へ……！」

審判をする先生の合図で闘技台へ上がる。

歓声があるが何て言ってるかはわからない。

斎藤はニヤニヤ笑って立っていた。

「ルールは特にない。お互い無理はしない様に。では、始め……！」
始まっちゃったよ……死刑執行か？

「よお。漣い、お前靈力21しかないんだって？？」

「……………」

余裕ぶった顔でしゃべりやがる。

「俺は靈力70もあるんだぜ?? 潔く降参しろよ。」

「お前なんか靈力無しでも倒せると思うから降参はやめとくわ。」

「はっ!! 靈力無しで倒せるってか?? それはこっちのセリフだろうが。」

思った通り自信だけいっぱいで安っぽい挑発にも乗ってくる。

「じゃあやってみるよ。」

「やってやるよ!!!俺はこの試合霊力を使わないぞ!!!」

斎藤は高らかに宣言した。

場内に歓声が響く。

「さあ来いよ。」

霊力無いんじやこの学園で1番ぐらいになつてやるよ。

俺は地面を蹴った。

一気に近付いて刀を振り上げる。

斎藤はそれを腕にしていたプロテクターで受け止める。

「はっ!!!そんなもんか!!!」

腕にもった剣を振り下ろす瞬間に俺は斎藤の懐に入った。

「そんなもんか。」

「すっげ〜じゃん。作戦勝ちだな!!!」

席に戻った俺をクラスメイトがもてなす。

「でも次はこうはいかねえぞ?」

順も応援してくれてたみたいだ。

「ま、任せとけよ。」

と勢い付いている自分に気付きながらも俺は言った。

次の相手は角元成美、女の子はやりにくいだろ。

第11話：学園序列決定トーナメント2

ちなみに拓也も俺の2つ後に戦った順も難なく勝った。

まあ80と78なんだから当然だろう。

ちなみにさつき優華と朋美が来て、

「じゃあご褒美あげるね」

って言うて帰ったので少し問題になった。

順が試合中でよかったとつくづく思う。

他のクラスメイトにはきちんと納得させたが順を納得させる自信はない。

ちなみに俺と角元成美の試合はあと5試合後だ。

優華がくれた情報によると角元成美は霊力42と低く（人の事言えないけど）かなりおとなしい子らしかった。

第1試合はクジでシードだったらしい。

おとなしい子って………よけいやりにくい。

元気ある女の子だったらまだまつしだったのに。

こりゃあ俺が余裕で勝っちゃったら女の子の人气が下がるかも……ってそうじゃなくて。

とにかくあんまし霊力ないんだしなんとか霊力の消費を抑えたい。

「安心して負けて来い。」

っていう暖かいクラスメイト一同の言葉を背に俺は闘技台へ向かった。

「始め……！」

つゝかなんであいつはあんなに震えてるんだよ??

「よ、よろしく。」

「あ、あの……わ、わた、私……戦いとか……あんまし……と、得

意じゃなくて。」

「で??」

「ひっ!!……怒らないで怒らないで。」

なんかすっげー罪悪感感じるんだけど。

「俺と戦って勝ったらまた戦わないとダメだぜ??」

「う、うん……だ、だから……」

「だから??」

「ふ、不戦勝で……いいです。」

「……………」

俺は審判の方を向く。

「えっ……………じゃ、じゃあ漣亮の勝ち!!!」

なんか知らねーけど勝っちゃったよ。

実はかなりいいクジ運だっただろ。

やっぱ日頃の行いいいんだな。

ちなみに大会記録の早さで俺は勝つたらしい。

席に帰ったらみんなから滅茶苦茶文句われたけど勝ち勝ちだ。

勝てば官軍……………。

第12話：学園序列決定トーナメント3

ちなみに次の試合で戦うはずだった奴が前の試合で負った傷で辞退したので3回戦も俺は不戦勝だった。

どうかこれから神の御加護がありますように。

拓也と順を含め内のクラスでは39人中9人が3回戦を突破した。運も実力の内だな。

優華と朋美も突破したらしい。

俺の次の対戦相手は好田傑って言う奴だった。

霊力は72……しかも頭がいいらしい。

客観的に見て俺の勝率は5%未満。

その5%に賭けるしかないのか…。

「おつかれ。」

今まさに勝って来た拓也をみんなで迎えるちなみに9人中4人はすでに負けている。

「やっぱ4回戦からは伊達じゃねーや。」

って事らしい。

「もうすぐ亮の番じゃねーの??」

「ほんとだ、もうすぐ亮の最後の試合じゃん。」

あながち最後じゃないとも言えないのでスルーした。

「じゃあ行ってくるわあ。」

「頑張つて。あんまり頑張るなよ。」

どうせなら霊力90とか言う奴で来いよな。

「両者前へ！！！」

好田傑は確かに強そうな雰囲気を出していた。

霊力は拓也や順に劣るはずんだけどあいづらより強いんじゃないかな？？」

「では、始め！！！」

「よろしくお願いします。」

礼儀正しく挨拶して来た。

「よろしく…お願いします。」

こういう真面目なタイプは苦手なんだよなあ。

ハツタリが効かなさそうだ。

持ってる武器は槍…拓也と一緒にか…。

好田は一気に差を縮めて突きを繰り出した。

「ッつ！！！」

間一髪でかわしたが今度は蹴りが襲いかかる。

「あつぶつね。」

なんとか体勢を持ち直した時に好田が話掛ける。

「やはり体術はかなりできるようですね。」

試してやがったのかよ。

「次は剣技を見せてもらいます。」

と防御体勢をとる好田に俺は斬りかかった。

1合2合と打ち込んで行く。

6合目でやつと退きやがった。

こいつ…槍術もかなりのもんだな…。

「やはり…剣技は大したものです。霊力がなくて助かりました。」

確かに霊力を使われるとマズくなるな。

その前に何とかしなくちゃなんね〜な。

「では…足元を掬われる前に終わらせてしまいましょう。」

霊力21の人間にそれはやめてほしいぜ…。

第13話：学園序列決定トーナメント4

俺は手を構えて集中してる好田に差を積み斬りかかった。

バチィッ！！！！

「痛えー！！！！何か電気走った！！！！」

刀が好田に届く前に何かに弾き飛ばされた。

「あれが霊力壁って奴かよ……やつかいだな。」

好田が霊力使って攻撃してきたら俺はおしまいだ。

何としてもあいつが攻撃の準備する前に試合を終わらせねーと。

「もう遅いですよ。」

地面に突き刺して槍を手にとって好田は言った。

その瞬間に俺は地面を蹴った。

「遅いって言うてるでしょうが。」

そう言っただけで好田は槍を突き出した。

反射的に刀でガードする。

その瞬間にぶっ飛ばされた。

ガラガラと音を立てて闘技台の周りに設置された壁の一部が俺の周りに落ちる。

頭を打つのは避けれたらしいが背中を直撃したらしい。

その上、手まで痺れてやがる。

「これでわかったでしょう。霊力無しじゃ僕には勝てませんよ。」
全く持ってその通りだ。

でも、どうせなら最後に少し悪あがきしてもいいだろう。

俺が出せる限りのスピードを出して差を詰める。

「なっ……！！！！」

ギリギリで槍を構えるがその時に俺はすでに好田の後ろに周っ

た。

「いくら強力な霊力でも当たんなきゃ意味ないんだよ。」
まだ反応しきれたない好田を俺は斬りつけた。

「そんな……霊力壁で防御したはずなのに……。」
霊力壁??

今度はそんな感じ全くなかったんだけどな。

「くっそおお!!!!」

ヤケクソかよ……。

とにかく無茶苦茶に突きを出してきた。

ダメだ……血を出しすぎて避けられない。

また反射てきに刀が出た。

このままじゃまたぶっ飛ばされるんだよな……。

正直言つて諦めかけたけど現実……俺がなんとか槍を止めてるらしい。

「な、なぜ霊力を持ってないのに……。」
そう言つて好田は倒れた。

なんとか……勝ったみたいだな……。
周りの音が聞こえない……。

なんか目の前が暗くなつて来た……。

もちろんこの後どうなったかなんて俺は知らない。
気が付けば医務室のベットに寝かされているところだった。

第14話：休息

俺は第4戦には勝ったもののドクターストップで第5戦には出れなかった。

総合序列32位らしい。

正直言つて霊力21にしちゃあかなり頑張っただろう。

拓也は16位順は22位だったらしい。

けっこうやるじゃん。

ちなみに俺の状態はけっこう悪い方らしい。

壁にぶつかった勢いで内臓が傷付いているらしい。

そりゃあ血がいつぱい出る訳だ……。

それと入院初日に拓也達が来て何か聞こうとしてたみたいだけど医療員に追い出されてたな。

気になると言えばそれくらいか……。

「やつほー！！元気かい??」

俺の思考を中止するには十分な声が病室に響く。

「優華ちゃんがお見舞いに来て上げました。」

……。

目の保養にはなるけど今は静かな方がいいんだけどな。

「あ、この子は寒川綾って言うの。私の友達。」

そう言えば優華の後ろにくっついていてる女子生徒がいる。

「あ、寒川綾ですう。よろしくお願いしますう。」

「よろしく。」

「で、容態はどうなの?? 霊力21のくせに序列32位の亮くんは。」

「

いちいち言つなよ。」

「別に普通だぜ?? 昨日の夜脱け出して怒られたくらいかな??」

「脱け出すなよ。」

と言いながら優華はりんごを剥きだした。

「そう言えば優華は序列何位だったんだよ?？」

「綾は30位だったんだよね。」

「はい。結構頑張りましたあ。」

「……………」

「私は25位、朋美は26位。」

「へえ。すぐじゃん。」

「って言うか俺の32位ってあんまりすごそうじゃねえよな。」

「あと亮の事で学園中噂があるんだけど容態に障るといけないから言っちゃダメだって言われたから言わない。」

「じゃあ言うなよとかいつのまに亮って読ぶようになったんだよとか突っ込み禁止。」

「このりんごおいしいね。」

自分で食べるのかよ。

食べながらチラチラこっち見るなよ……。

「はい。1つぐらいあげるわよ。あ〜ん」

なんか乗りで食べさせてもらった。

「優華あ。もう授業が始まりますよあ。」

「あ、ほんとだ。じゃあもう行くね。」

「ああ。楽しかったよ。」

「じゃあまたりんご食べに来るから。ばいばい。」

もつとまじな理由で来いよ。

「つか周りからの嫉妬の視線が痛い。」

余計早く退院したくなつて来た。

第15話：新靈力種

いざ退院してみると結構ややこしい事になっていた。

どうやら俺が靈力使って戦ってたらしい。

好田の反応が間に合わないくらい速く動けたのも、靈力壁や靈力での攻撃が効かなかったのもそのせいらしい。

って事は靈力使ったの最後のちよつとだけだろ??

あんま使えてねーじゃん……。

「だから、問題は亮が靈力使えたとかそこじゃなくて靈力の種類なんだよ。」

「靈力に種類なんてあるのか??」

初歩的な質問ですみませんねえ。

これも読者の為……じゃなくて何もわかってない俺の為なんで。

「だから、靈力にはいくつか種類があつて、大きく分けて3つあるんだよ。」

遠距離型と治癒型と対物型らしかった。

まだまだ拓也の半分キレた状態の説明が続く。

「遠距離型は遠距離攻撃、治癒型は治癒力、対物型は武器に靈力宿して戦うんだよ。」

ちなみに靈力壁はどれでも作れるらしかった。

「だから何だよ??どこが問題なんだ??」

「はあ。」

クラス一同の溜め息でございます。

「お前は靈力を体の表面と武器の表面に圧縮して使ったんだよ。」

「なるほど。それであんなスピードやらが出る訳か。」

「そんな能力は世界中で発見されてないんだ。」

……。

束の間の沈黙。

「じゃあ……俺は世界初の人間なのか??」

「やっとわかったのかよ。」

すかさず順の突っ込みが入る。

「つつすっげ〜!!!」

「は??」

「世界初だろ?? すっげ〜じゃん!!! いや〜流石俺??」

「……………」

まだ俺は状況を理解できてない??

拓也君お願い!!!!

「世界初って事は、前例がないんだ。」

「それくらいわかるって。」

「って事はどうやって訓練すればいいのかもわかんね〜し、どう応用するかもわかんね〜んだよ。」

「……………」

黙って聞いてマス。

「強くなる為には並大抵の訓練じゃダメって事なんだよ。しかも効果的な訓練方法が見付かるまでは訓練量に比例して強くなれる訳じゃないんだ。」

なるほど、やっと状況が理解できた。

でも俺にとっちゃ大した事じゃないんだけどな。

「だからなんだよ?? 人の倍しても普通の奴に追い付けないって事だろ??」

「ああその通りだ。」

「じゃあ俺は人の10倍訓練してやんよ。」

たった100年の人生…………… どうせなら誰よりも強くなって死んでやるよ。

第16話：補習

人の10倍訓練してやるって言うてみたけど実際はまず基礎かなだった。

井伊の話によると

「お前は靈力を戦いの中でどう使うか天性的にわかってるんだから靈力があれば今の倍以上強くなるはずだ。」

らしかった。

マジかよ……。

強くなるのって簡単だなあ。

「そっからが難すぎんだよ。」

ちなみにこれは順の言葉。

夏休みに入るまで普通の授業に出つつ井伊と1対1の補習だった。

正直かなり辛かった。

何回か1年と一緒に授業受けたからなあ。

そのおかげで1学期が終わる頃には靈力が55まで上がっていた。

ちなみに全国平均が50だそうだ。

でもいくら靈力が上がったからって強くなる訳じゃなかった。

靈力が上がった分コントロールが難しい。

俺の能力はコントロールができてないと体の内部から靈力分のダメージがくる（実証済み）

「どうしたもんかねえ。」

「大変だなあ。」

「ああ。」

気温が高く暑いせいか教室の空気と共に会話もだれてくる。

「そう言えばさ。」

今までほとんど機能停止していた順が何か思い出したみたいだ。

「井伊が亮読んで来いってさ。」

「そっかあ。」

「いつ言われたんだよ??」
なぜか拓也が聞いた。

「30分くらい前だったかなあ。」

.....。

俺も機能停止したい.....。

そう思った時放送が流れた。

『漣亮、漣亮、今すぐ職員室まで来なさい。』
お決まりのタイミング。

職員室はかなり涼かった。

「夏休みなんだが、講習があるのは知ってるよな??」

「明日からっすよね。」

「お前は出なくていい。」

「.....マジで??」

「ああ。その代わり俺と補習だ。」

.....。

講習に出たいです。

「期間は講習と一緒に気にするな。」

でも井伊と1対1はもう飽きました。

でも言っても無駄だろうなあ。

「駄目だ。」

言ってみただけど無駄だった。

明日から夏休みだけどあんまり嬉しくない。

夏風邪でも引こうかな.....。

第17話：夏休み

『待ちに待った夏休み！！』ってのがよかったんだけど、そうはなつてくれないらしい。

毎日毎日、朝から晩まで補習だった。

講習は昼とかで終わってるだろ……。

そんな悪魔の補習も明日で終わる。

徐々にテンションが上がってくる。

人の10倍って事は夏休みに遊んでる暇なんかないはずだけど、まあそこは我が親愛なるクラスメイト諸君の寛大な心を期待しよう。

「これでなんとか今のクラスで授業を普通に受けれるだろ。」

5時になってやっと井伊が言った。

「マジで！？よかったよかった。」

「それにしても、2ヶ月でここまでできるとはな。」

「ん〜。やっぱり天才だよな。」

とは言ってみたものの実は家でもかなり訓練したからな。

俺ってば結構努力屋さん？？

ちなみに今更だけど、俺達が住んでる国の説明をしておこう。

名前は、……………何だったっけな？？

30年前に戦争で負けてデイルファリアって言う大国に負けて、今じゃデイルファリアの保護を受けてるし、世界でも数少ない平和な国だ。

つまり夏休みになれば海水浴とかいろいろできる訳だ。

って事で、前々から拓也に誘われてた可愛い女の子と海水浴って奴が明日決行される訳であります。

何かこじつけっぽくてすみませんねえ。

俺に文句は言わないで下さい。

ちなみに行くメンバーは俺と拓也和順、女子は優華に朋美に綾らしい。

可愛い女の子の水着姿が見れるのでお楽しみに（頑張って想像して下さい）

海水浴当日、かなり晴天、日焼けにご注意下さいって感じかな？？
海水浴場までは朋美の親が送ってくれるらしい。

「朋美ちゃんの家って何してんの？？」

迎えに来たりムジンを見て拓也に聞いてみた。

「確か……国認の武器製造会社の重役だったかな？？」

「知らなかった……。」

順も同じらしい。

お前は知つとけよ。

「それにしてもラズポリスでよかったねえ。夏休みに海水浴できるなんて」

そうそう、この国の名前はラズポリスだった。

「去年は3人で行ったよね？？」

「はい。楽しかったですう。」

どっちかって言うと朋美より綾のがお嬢様だろ。

「亮は泳げるの？？」

「何でもできないみたくなるな。霊力に関係なかったら何でもしてやるよ。」

ちよつとムキになった。

「じゃあ、かき氷買ってね？？霊力に関係ないよ。」

「……………」

優華と喋っているとどうしても調子が狂う。

第18話：海水浴

ちなみに俺達が着いたビーチは世界でも1、2を争う所らしい。

まあ海水浴なんかできる所が少ないんだけど。

でも、まあかなり綺麗だった。

「お前、もう補習行かなくて大丈夫なのか?」

「なんとか普通の授業受けれるってよ。」

ちなみに女子3人と順は遊びに行った。

「本当は序列何位ぐらいなんだろうな?」

「32位だ。」

「かなり運がよかっただけだろ??」

まあその通りと言えばその通りなんだけどな。

今じゃ32位より上な自信はある。

「疲れたあ。」

とビーチバレーをしていた4人が帰ってきた。

「ねえ。亮。」

「何だよ??」

「かき氷食べたい」

「……………。後で払ってやるよ。」

何気なく言ってみたんだが優華は怒りだした。

「女の子1人で行かせる気なのかあ!」

「…………。一緒についてきて欲しいのか??」

皮肉だったんだけどな…………。

「うん」

そんな嬉しそうな顔されちゃ断れねーよ。

って事で2人で浜辺を歩き出した。

ちなみに優華の水着はシンプルなビキニ。

白だった。

「何見てるのよ!」

「いや、別に見てね〜じゃん。」

「うわあ。えろっちいなあ。」

……男なら誰でもお前の水着姿見たら同じ事想像するだろ。

「亮ってさ、西院に来る前は学校行つてなかったんでしょ??」

「ああ。」

「何してたの??」

それはちよつと触れて欲しくないなあ。

多少知られたらマズいかもしらねえ。

「ちよつと……ね。」

「言えない過去つてやつ??」

「そうそう。謎の転校生だろ。」

「何よ気取っちゃつて。」

そんなすぐにすねるなよ。

なんか気まずいだろ。

「じゃあさ、何してたか知れないけど、彼女とかいたの??」

……何を聞いて来るんだよ、このジョシコウセイは。

「そりあ、それなりにいたけど??」

「遊んでたんだ。」

「何でそうなるんだよ??」

つゝか何でテンション下がってるんだよ??

「優華はどうなんだよ??」

「私はあ、今も今までもずっと付き合つた事ありません。」

「嘘だろ。お前で付き合えなかったら誰も…。」

「好きな人がいなかったんだもん。私はすつごく好きになった人
しか付き合わないの。」

「べ〜」

と舌を出して俺の前を歩き出す。

女の子つてのはつくづく謎だな。

ちなみに何故か朋美と綾の分も買わされて俺達は戻った。

それからは優華もいつも通りのテンションで過ごしていた。

何だったんだろな……さっきの会話は。

第19話：新学期

それからあのメンバーでいろいろ遊びに行った。
遊園地も行っただし映画も行っただし……。

ここで宿題をしてないってのに気付くのがお決まりだけど、俺は補習で宿題もやらされていたのでそういう事はなかった。

ちなみに順は全くやってなかったらしく、最後の5日で綾に手伝わしてもらいながら、なんとか終わらせたらしい。

俺も

「手伝わてあげよつか??」

って優華に言われたけど……。

始業式は遅刻した……。

どうやら学期の始めとかなんかは遅刻する習性があるらしい。

「また遅刻かよ。」

ってみんなに言われたけどそれじゃいつも遅刻してるみたいじゃねーか。

「そう言えば2学期に修学旅行あるんじゃないの??」

「ああ……あるなあ。」

???

修学旅行って普通楽しいもんじゃねーの??

なんで嫌がつてんだよ??

「ウチの修学旅行は強化合宿みたいなもんなんだよ。」

「強化合宿??ドコ行くんだよ??」

………なんか無茶苦茶だな、西院学園。

「それぞれ違うんだよ。何人かのグループに分かれて、行き場所はクジ。」

「へえ。いい場所に当たるといいな。」

「ちなみに場所は全部、危険度Bだ。」

危険度B地区……戦う技術を持っていなければ確実に死ぬ地区、かなり重度の警戒が必要……………

だったはず。

……………修学旅行って言うより……………マジで強化合宿ですね……………。

「去年はたしか、3人死んだよな??」

「そうだったな。かなり多数の重症者もいたって話だしな。」

そんな事続けてて苦情来ないのかよ。

「だから2年は修学旅行までサバイバル技術の授業はっからしいぜ??」

「サバイバル技術のテスト合格しなかったら修学旅行行けないらしい。」

「ラッキーじゃね?かよ。」

率直にそう思った。

「修学旅行行けなかったら単位をくれないんだよ。」

ちなみに西院は留年なんて制度とっていない。

単位を認定されなかったら、即、退学らしい。

修学旅行まであと1ヶ月ちよつと。

その間のサバイバル技術の授業は俺にとっては……………どうだろうな。

第20話：特別授業1

次の日から早速サバイバル技術の授業が始まった。
特別授業講師つてのが来て教えるらしい。

今日の時間割りは、1時間目特別授業、2時間目特別授業、3時間目特別授業……（以下略）って事でずっと特別授業だった。

「このクラスの特別授業を担当する中羽だ。」

これが俺達の特別講師の名前。

ちなみに授業は楽しく、おもしろく、がモットーらしい。

「では、1問目です。あなたは今、無人島に漂流しました。始めに何をしますか??」

……こんな授業。

確かに楽しく学べるけど多少不安になるだろ。

「では、今日習った事を復習する為にテストをします。制限時間は10分。始め!!!」

ちなみに俺は満点だった。

「どう言う事だよ??」

中羽が俺を褒めまくって帰って行った後で順に言われた。

「サバイバル技術は……得意分野なんだよなあ。」

「みんな初めて受けるんだぜ??得意も何もあるかよ。」

拓也の突っ込みってかなり痛い所突いてくるよなあ。

「いや……だから……西院来る前にちよつとサバイバルの経験あったんだよ。」

このまま行けば次に誰かが言う言葉は……。

「だから、西院来る前って何してたんだよ??」

……これ。

「き、企業秘密。」

苦しいな……。

「過去を匂わす男って格好いいじゃん!!!」

我ながら、言い訳にしか聞こえない。

「どうせ、何でもないんだろ??」

「靈力なかったもんなあ。」

……不本意に言われようだけど、それでいいっす。

それから毎日テストで満点とってやった。

ざまあみろって感じ………だったんだけど、みんなも90点代ばかりとれるようになって来たからなあ。

明日からは、実際に行動してみるらしい。

この学園には、雪積もらせたりジャングルになってる部屋があるらしい。

よけい訳わかんねえ学校じゃなかよ。

「亮って特別授業すつごいできるんでしょ??」

「また例の情報網か??」

「うん　なんでって聞いちゃダメって事も知ってる。」

それはよかった。

—安心。

「私、あんまり得意じゃないなあ。」

「なんでだよ??」

「女の子だし??サバイバルってのは向いてないの。」

「どうせそんな事だろうと思っただよ。」

睨まれた、……可愛い………冗談だろ、引くなよ。

ちなみにこれは優華との食堂での会話。

今日はたまたま一緒になった。

周りはいつも一緒に食べてるって言うんだけどな………。

昨日はお前達と食べたろって言うのに。

第21話：特別授業2

今日は実践練習の日だ。

午前中は雪ね中での寝床の確保の仕方をするらしい。

雪の中じゃあ普通に寝ると凍死してしまう可能性があるから、寝床の確保が重要になってくる。

まず縦に穴を掘って、その穴の中から横に穴を掘り、小さな洞窟みたいな空間を作ると言う寝床の確保が1番メジャーだな。

無理なら無理で、蒲倉でも作ればいい。

まだ9月なのにみんなで厚手のコートやら何やらを着て積雪室に集まった。

「って言うかサブっ!!!」

騒いでる順に雪玉を投げた。

それから30分間、中羽も含めクラス全員で雪合戦をした。

拓也が止めてなければもつと続いていたはずだ。

「では、今から1時間で各自寝床を確保しろ。」

自分も遊んでた後でよく言えるぜ。

1時間後、積雪室にいろんな建造物が出来た。

みんな掘る事はしなかったみたいだ。

「では、みんな漣の所に集まろう。」

俺以外の生徒を全部見て周ってから中羽は言った。

「漣が作った様に穴を掘るのが1番簡単で1番暖かい寝床を確保できるやり方だ。」

「でもさ、先生。雪なだれとか起きたら埋まっちゃうぜ?」

順は何とか俺失敗してる様に持って行きたいらしい。

……昨日さんざん馬鹿にしたからなあ。

「それはみんなが作った蒲倉だって一緒だ。1番大切なのは安全な場所を探す事だ。」

ちなみにこの後は自由時間。

しつかり授業しろって。

「亮、もう妬んだりしねーから教えてくれよお。」
やっと順が折れた。

「わかったよ。始めからそう言っとけ。」

「うるせえ。」

って事で順にいろいろ教えた。

午後からは密林地帯での寢床の確保だった。

まあ言うまでもなく大丈夫だった。

1週間ずつと実践練習らしい。

「意外と簡単だなあ。」

やっとコツを掴んだらしい順はご機嫌だ。

「今日は拓也、朋美ちゃんと一緒に帰る日だったよな?。」

「今日は先に帰つといてくれたってさ。」

「おっ……怪しいぞそれ。」

「残って練習するらしいわあ。」

「……全く怪しくねーな。」

順の期待は一瞬にして崩れ去った。

「はっ!……!そうかいそうかい。じゃあ俺は女の子を待たせてるか
ら。じゃーな。」

と言って順は走り出した。

……女の子を待たせてる??

誰だよ……その女の子って。

明日、尋問だなあ。

第22話：抽選会

朝、順が来たら即効拓也と昨日誰と帰ったのか聞いてみると

「ああ。あれ?? 嘘だよ。」

って言ったんだけど信用していいものか…。

まあ信用してやるとしよう。

それから2週間ぐらいたって修学旅行へのカウントダウンがはじまった。

修学旅行まであと5日って言う今日は説明会があるらしい。

俺も順も途中で寝てしまつて、後で拓也に説明をもらった(説教付き)。

「まず今日中にチームを決めなくちゃいけないんだよ。約6人チーム。男女混合可。」

「なるほど。」

さつき嫌と言うほど拓也に怒られたので2人で黙って聞いていた。

「で、俺と朋美は一緒に行こうって言ってるんだけど。」

「ふんふん。」

「お前達は俺に着いてくるだろ??」

「うん。」

「で、朋美は雁原と寒川連れてくるから、これで6人チーム完成。」

「かなり単純なチーム構成だな。」

「嫌なら抜けてもいいぜ。」

確かに順の言う通りかなり単純なチーム構成だな。

お決まりの6人ってか??

しかも手続きは全部拓也がやってくれるらしい。

「お前達がするより俺がやった方が確実だ。」

だそうだ。

拓也は頼りになるなあ。

それから2日後に抽選会があった。

今は拓也と朋美が抽選会から帰ってくるのを待ってる。

「どこになったの??」

と優華は帰って来た朋美を見てすかさず聞いた。

「え〜と。サンペルシカ島だったかな??」

「ドコだよそれ??」

「聞いた事ありませんねえ。」

「今から調べるんだよ。」

.....。

「オランダ海の真ん中らへんの無人島だよ。」

5人が一斉にこつちを向く。

「漣くん、しってるの??」

「ああ。あんま行きたくないな...。」

「でも、オランダ海だろ?? 戦闘地区じゃないんじゃないか??」

「密林しかない島だぜ??」

「うつそ〜!!! やだっ!!!」

「何で知ってるんだよ?? また過去の話か??」

「ああ。行ったことはないけどな。聞いた事はある。」

「とにかくもつと詳しく調べてみる。」

そう言つて拓也は教室を出て行つた。

図書室へでも行つたんだろう。

「あ、待つてよ!!」

朋美が後を追う。

「密林ですかあ。クジ運悪いですう。」

「拓也達に行かせるべきじゃなかったよなあ。」

今さら何を言っても仕方ないので俺は何も言わないがそれなりの準備はして行った方がよさそうだ。

第23話：修学旅行1

拓也がサンペルシカ島の事を図書室で調べたけど、密林だけの島だと言ふ事以外の大した事はわからなかった。

何か対策を練るはずだったんだけど、順の

「亮がいるからなんとかなるだろ。」

つて言う言葉にみんな納得してしまった。

確か何かマズい事があった気がするんだけど覚えてない。

まあ何とかなるだろう。

で、修学旅行当日になった。サンペルシカ島までは学校から船で送ってくれるらしい。

航海日数3日………修学旅行は1週間のはずだから島で4日過ごす事になる。

「見えたぞ!!!」

と甲板から順の叫ぶ声がするので甲板に上がった。

「うわゝ。緑ばかり。」

「優華ちゃんは軽くショックです。」

「私もです。」

女性陣の反応。

「今になって不安になって来た。」

「亮がいるから大丈夫だって。」

俺を除いた男性陣の反応。

島に近付くにつれて誰もしゃべらなくなってきた。

「じゃあ4日後にここで待っとけよ。」

そう言い残して船は戻って行った。

「今、何時??」

「8時ぐらい。」

「じゃあ、ロードワークすつか。」

「って事で3時間ぐらい歩きまわってやっと落ち着けそうな場所に着いた。」

「じゃあ、私達昼ご飯の準備するから寝れるような所作つといてね。」

「出来たら呼べよ??」

とカップル2人が勝手に決めたので俺達は寢床を確保する事にした。俺達が生活する場所は川の上流あたりにあるちよつとした広場だった。

「どんな風なん作るんだよ??」

「1人分ずつ作ってたら時間足りなくなるからな。全員が寝れるもんにするか。」

「ま、妥当だな。」

上から順、俺、拓也。

「じゃあ順は骨組みになるような木、拓也は柔らかい草みたいなん採ってきてくれ。」

「ういゝ。」

俺は、もうちよつとロードワークでもしてみるかな。

俺達がそれぞれの仕事を終えて、広場に戻って来てからすぐに綾が呼びに来た。

「ご飯できましたよあ。」

「あゝ。やつとかよあ。」

「疲れた、疲れた。」

ちなみに本日の昼ご飯は、スープとパンだった。

「すっげー簡単な食事だな。」

「文句言わない。」

昼食後はみんなで集めて来た木とかを使って寝床を作った。

「疲れたああ。」

「もう、夜になっちゃいましたあ。」

「あゝ腹減ったあ。」

「お前はあんまり動いてなかっただろうが。」

「うるせえ。亮と違ってなれてないんだよ。」

1日目の晩ご飯は持って来たものでまかかった。

明日からは自分達で探さなくちゃいけないけどな。

第24話：修学旅行2

修学旅行2日目の朝は、昨日の残りでなんとか食べた。

「昼からは何するんだよ??」

「食料調達しないといけないからな。」

「食料調達って何を採りにどこに行くの??」

「30分ぐらいの協議で女子は肉は嫌だと言う意見が一致していた。いろいろ汚そう。」

が理由らしい。

さらに30分ぐらい協議して、3つのグループに分かれる事になった。

拓也、朋美チームは待機と寢床の見張り。

順、綾チームは海に出て魚を採ってくる。

そして、俺と優華は森の中歩きまわって食べれる植物を採ってくるらしい。

昼ご飯は余った米で作ったおにぎり。

暗くなる前に帰ってくる事が決定事項だった。

「私も待機がよかったあ。」

「文句言つなよ。ジャンケン負けた優華が悪いだろ。」

「って言うかこんなの食べれるの??」

籠に入っている植物を取って優華が言う。

「それは食べるんじゃないで、傷薬みたいなんになるんだよ。」

「ふゝん。ますます過去が知りたくなってきた。」

絶対教えません。

そろそろ諦めろよ。

「でも亮は昔、遊んでたんだよねえ。」

「遊んでないって。」

「彼女いたって言ったじゃん。」

「そのどこが遊んでるんだよ??」

「不純異性交友だ。」

「……………何を考えてるんだろうな……………この馬鹿は。」

「じゃあ、拓也和朋美ちゃん是不純異性交友だろ。」

「あれは、恋愛です。」

どう違うって言うんだよ。

「亮はほんとにその彼女の事好きだったの??」

「……………好きだったから付き合ってたんだろ。」

「今は??」

「……………今は…別に。」

「何よ??その間。」

なんでこの前から2人になるとこんな話になるかな??

「そう言えば何でお前は好きな人ができないんだよ??」

「んゝ。理想が高いのかな??」

「どんなのが理想なんだよ??」

「安心して私の事を預けられる人かな。」

「それだけ??」

「そお。それ以外は格好よくなくても、別に優しくなくてもいい…

…くはないかもしれないけど。」

「なんだよそれ。」

「とにかく好きな人ができなかったんですッ!!!!」

やっぱり女の子はよくわからない。

何を考えてるんだか全く予想もつかねえよ。

「はい。もおこの話終わり!!!なんか気まずいじゃんか!!!」

自分から始めたんだろ。

「ってかそろそろ帰らないと暗くなっちまうな。」

「ほんと!??じゃあ早く帰らないと。」

そう言って優華は先に歩き出す。

「おい、優華！！！」

「はい??」

「帰り道分かるのか??」

「……………」

順と綾はきちんと自分達の仕事をしたらしい。
かなり魚があつた。

「今日食べる分だけでよかつたのよ??」
料理した朋美が言う。

「なんでだよ??」

「こんなもん1日たつたら腐るぞ。」

「あ……………」

「だから言つたんですう。」

綾もいろいろ苦労したつばいな。

「私、明日は待機がいい!!!!」

「私ものです。」

「じゃあ、俺達は明日、山菜採りにするか??」

「うん。そうする。」

その後どっちが休むかで一悶着あつた。

第25話：修学旅行3

昨日、優華と綾は1時間ぐらい話し合いで決めようと思ったらしく話していたのだけど、どうやら最終的にはジャンケンで決めたらしい。

どうなんだよ。

で、結局俺達は待機する事になった。

暇そうだから嫌だったんだけどな……。

「意外と暇だねえ。」

自分で待機を勝ち取ったくせにこんなことまで言いやがった。

「我慢しろって。昨日歩き疲れたんだろ??」

「ぶ〜。」

だから可愛いって……なんつって。

それから1時間ぐらいたっていきなり草むらから気配がした。

「……ねえ……。このジャングルって獣とかいるの??」

優華のこの言葉で思い出したんだけど、昔、知り合いからどっかの政府が霊力を持った獣……霊獣を作って実験としてある島に放したって話を聞いたことが……あったような、なかったような……。

「でも、ロードワーク中、獣どころかウサギとかもいなかったもんね。大丈夫大丈夫。」

優華は自分で自分を納得させたいらしい。

「ウサギもいなかったからこそ何かいるかもしれないな。」

その気配は動かないが、ずいぶん殺気を持つてる。

「優華……武器。」

優華は立掛けてあった自分の細身の剣と俺の刀をとる。

俺が刀を持つのを見計らっていたように獣は草むらを飛び出した。

「うつわ。優華ちゃんは少し怖いです。」

もうちょっと女の子らしい怖がり方してほしいです。

大きさはライオンを一回り大きくしたぐらい、体の格所に青い先が入っている。

「あいつ…霊力持ってるから気をつけろよ。」

「霊力持ってるの?」

「たぶんな……。」

そんな会話をしてる暇はなかったようだ。

いきなり飛びかかってきた。

一回の跳躍で一気に俺達のところまで飛んで来る。

「うわっ!! 爪伸びた!!!」

まずは優華に遅いかかる。

「牙も長くなるはずだから注意しとけよ!!!」

さすがにこんな状況だからか、

「何で知ってるの?」

とは突っ込んで来ない。

後ろから攻撃しようとするとしつぽがムチの様に襲ってくる。

「後ろにも目が付いてんのかよ!」

つてぐらい正確に足下を狙ってくる。

次の瞬間、優華が細長く針の様な霊力弾を発射した。

当たる面積が小さい分少量で威力も高い。

近距離だったので獣は避けようがなく、後ろに後退した。

「やっとなの特訓の成果を読者諸君に見せれるぜ。」

「特訓??、補習じゃなかったっけ?」

……。

優華とほのぼの喋っていると、獣が口から霊力弾を出した。

優華が前に出て霊力壁を作る。

「霊力戦は任せた!!」

俺はそう言って霊力を足に圧縮して地面を蹴った。

次の瞬間には、俺の攻撃範囲まで近付く。

フエイントを入れて刀を振り下ろす。

その瞬間に後ろに吹っ飛ばされた。

「痛ってゝ。霊力壁の事忘れてた。」

「もう1回補習受けなきゃね。」

優華は言いながら霊力の玉を作り出す。

「援護お願い!!!」

言われた次の瞬間には俺は獣の近くにいます。

次は霊力壁に吹っ飛ばされないように刀にも霊力を圧縮する。

ものに圧縮した霊力は本来の霊力とは全く違う性質になる。

そのため、霊力壁などの並大抵の霊力では全く太刀打ちできない（らしい）。

今回もその例外ではなかった。

さつきと同じ形で刀を振り下ろす。

獣は叫び声を上げて後退する。

「亮!!!どいてっ!!!」

と言う声が後ろから聞こえたので俺はその場を離れる。

その直後に1メートルぐらいの大きさになった霊力の玉が獣に向かう。

首筋を傷付けられて、大量に血を流している獣はふらふらしながらも避けようとしている。

優華は少し霊力の軌道を変えた。

獣はそれと反対に逃げようとする。

そこに優華が小さな霊力弾を撃つ。

それを避けた獣は自分から霊力の玉に突っ込んだ。

それから獣は動かなかった。

第26話：修学旅行4

獣の叫び声や靈力に反応して拓也達4人が戻って来たときにはもう全て片付けた後だった。

「な、何だコイツ?」

「靈獣だよ。かなり強かったんだから。」

「靈力持つてるのか??」

「どっかの国の研究段階の生物兵器だ。」

順や拓也の疑問に俺と優華が答える。

「どうしてかわからないけど、かなり弱ってた。」

「他にもこんなにいるのかなあ??」

「うう。嫌ですう。」

「他にはいないはずだ。」

「何で??」

「たぶん、生き残りなんだよ。」

「前は他にもいたって事か??」

「ああ。何匹かこの島に放してどれが1番強いを試したんだろ。」

俺は昔に聞いた話を完璧に思い出していた。

あの時は、こんなに関わるとは思っていなかったけど。

「普通こう言うトラブルは最終日に起きるもんなだけだなあ。」

俺はこう言ったが次の日：つまり修学旅行最終日は全く何もなかった。

平和すぎた。

「やっと終わるんだね。」

「早く帰ってお風呂入りたいなあ。」

「魚はもう食べたくありませんよお。」

女性陣。

「俺も魚は嫌だな。」

「俺はベットで寝たい。」

拓也と順。

「あと1日ぐらい長くてもよかったなあ。」

全員に睨まれた。

冗談に決まってるだろ。

毎晩、毎晩、隣で寝てる優華の寝息が気になって寝不足なんだよ。

……これも冗談。

「あれ??まだ船来てないな。」

海岸に付いた俺達だったけど船はまだ来てなかった。

「おかしいな。もう来てる頃だと思ったんだけど。」

「ここであってるんですかあ??」

「あってるわよ。」

こっちは早く帰りたくてウズウズしてるのに。

「ねえ、亮??」

「ん??」

「あれ、船じゃない??」

優華が指を示した方を見ると確かに船があった。

「やつとかよあ。」

「おそいですう。」

「行きの船とは違うな。」

なんか、不吉な予感がする。

「拓也、双眼鏡持ってただろ??」

「ああ。どうかしたのか??」

「あの船が掲げてる旗を見てくれ。」

拓也は首をかしげながらも双眼鏡を取り出す。

優華は何か言おうとしたが言わなかった。

たぶん俺が真剣な顔をしていたからだろう。

「こっちに向かって来てるから大丈夫だって。」

と順は言ったが……。

「バラが3つ付いた盾が書いてあるぞ。」

拓也が双眼鏡を覗きながら言う。

バラが3つ……盾……。

「古代3国同盟だ！！！」

「は??」

俺以外の5人は意味が分かってない。

「デイルファリアが負けたのか??」

第26話：修学旅行4（後書き）

この度は『黒き征裁』を読んで下さり誠にありがとうございます。
第26話を持ちまして第一部が完結いたしました。

第一部が完結いたしましたので記念に番外編を短編で書こうと思っています。

読者のみなさまにもより楽しんでいただくために、番外編のテーマを募集したいと思います。

もしよければ評価の所にリクエストして下さい。

読者のみなさまの意見を参考にさせていただきます。

どうぞ気軽にリクエストして下さい。

最後になりましたが、これからも『黒き征裁』を続けていくつもりですので、今後ともご支持の方をよろしくお願いします。

第27話：現状把握

古代3国同盟って言うのは、イギリス、フランス、スペインの同盟の事だ。

かなり昔から繁栄してるらしい。

まさか同盟しているとは思わなかった。

3国共、デイルファリアに敵対していたはずだ。

その船がオランダ海……つまりデイルファリア領海に入ってくるって事はデイルファリアが負けた事になる。

負けたと仮定すると、何故負けそうだと言う情報が入って来なかったことは、デイルファリアが情報操作をしていた……で納得できるが、何故、今、サンペルシカ島に現れたのが説明つかない。

船が岸に着くと軍服姿の男が4人降りて来た。

イギリス語、フランス語、スペイン語でそれぞれ話だす。

「は??何言ってるんだよ??」

「順くん!!!ダメですう!!!」

いつのまに順くんって読んでるんだよ??

……じゃなくて……。

「何語だよ??」

と言う拓也の腕を朋美が掴む。

「何も言っちゃダメだからね。」

俺が何か言う前に優華が俺の腕にしがみつinaが言う。

その間にも3人で順番ずつにそれぞれの言葉で喋り続けている。

すると、後ろに立っていた男が3カ国語で喋り出す。

男が喋り終わると3人はいきなり俺達を掴んだ。

「ちょ!!!何するんだよ!!!」

「離せて!!!」

「静かにしとけ!!!順!!!絶対攻撃するな!!!」

俺の叫び声に拓也や順どころかその場にいる全員の動きが止まった。

「いいから……今は従え。」

優華が俺の腕を掴みながらこつちを見ている。
今は何も説明してる暇じゃない。

船の上に行くと他の西院の生徒もたくさんいた。

そして、その全員が檻みたいな立方体の所に入れられている。

「えっ???どういふ……」

優華の口を俺は塞ぐ。

それからイギリス、フランス、スペイン語で言った。

「まず、俺以外の5人をあそこに入れる。」

3人の男は後ろの男を見てから俺の言った通りにした。

「優華……大丈夫だから今は従え。」

優華が何か言おうとした様なので先に言った。

優華は口を開いたが何とか黙って従った。

さつき3カ国語で喋っていたのは、

「デイルファリアが負けた。デイルファリア国民は直にデイルファリア本土に戻れ。」

と言う内容だった。

きつと西院の生徒や本土にいないデイルファリア人を本土に返すために派遣されたんだろう。

「で、今から俺達を本土に帰すんだろうな??」

「そうだ。」

「全員の安全は保証できるんだな??」

「この船に不備はない。」

「そんな事聞してるんじゃない。」

「……保証しよう。」

こんな感じの会話が続いた。

結局は俺も檻の中に入った。

その中で全員に今の状況を説明し、命の危険はないと落ち着かせた。
命に危険がないとわかって皆安心したのかどんどん眠っていった。
拓也と朋美は寄り添って寝ている。

順と綾は反対を向いてはいるもののたぶん手を繋いでいるだろう。

……いつの間にそんな関係になったんだよ……。

「亮……??」

と優華が話かけてくる。

「まだ起きてたのか?? 疲れてるだろ??」

「亮もじゃない。ずっと起きてるつもりでしょ。」

「……………」

さすがにこの状況で全員寝るのはマズい。

「サンプルシカ島でだってあんまり寝てなかったでしょ??」

何で知ってるんだろうな??

きちんとカモフラージュしてたはずだけど。

「霊獣いるの知ってたからだよね……。」

「……………」

「亮はいつもそうだよね……。何でかは知らないけど何でも1人で解決しようとする。」

優華の俺の腕を掴む力が強くなる。

「少しぐらい頼ってよ。…………私じゃ役に立たないかもしれないけど。」

「そんな事ねーよ。俺より強えじゃんか。」

「亮の方が強いよ……………」

こんな優華を見るのは初めてだ。
今にも泣きそうな顔をしている。

「役に立たないかもしれないけど、癒すぐらいだったら私にもできるでしょ??」

「……………」

「私の前じゃ無理しないで。」

「…………優華……………」

「そうだぜ。無理しすぎだ。」

「俺らの事も少しは頼れよ。」

「癒すのは優華しかできないかもしれないけど、他の仕事は私でも

できるんじゃない??」

「私だって、漣くんの役に立てますう。」

「拓也…順…朋美ちゃん…綾ちゃん…」

「1人で荷物しよいすぎなんだよ。」

「サンペルシ力島でゆつくり寝かしてもらった分、今度はお前が寝るよ。」

「優華もですう。」

「漣くんを気遣ってあんまし寝てないでしょ。」

「たたく……狸寝入りか??」

「優華……癒してくれるんだろ??」

優華が笑顔をこっちに向ける。

「うんっ」

「じゃあ寝るぞ。」

他の事は4人に任すとしてもしよう。

俺と優華は寄り添って眠りについた。

優華の香りと暖かさを感じながら……。

こりゃあ、かなり癒されるな……。

第28話：敗戦国の現状

起きるとまだ優華は寝ていた。

昨日の事思い出すとかなり恥ずかしくなってきた。

「ラブコメになっちゃうじゃね〜か。」

1人言なので気にしない事。

少したつと何人かの男が全員分の朝食^{パン}を運んで来たついでに俺を呼んだ。

どうやらお偉いさんが話をしたいらしい。

「どうして君は古代大国の3カ国語を喋れるのかね??」

かなり豪華な部屋に案内されて、少し待っているといかにも強そうな男が入って来て言った。

「あんただって喋れるだろ??」

「私はイギリス人だ。喋れなくては困る。」

「……………」

「それに、その態度……あまりにも悠然としすぎている。」

「俺だけが特別みたく言うなよ。言葉がわかればもつと落ち着いてられる奴が檻の中にいるだろうよ。」

なんか面倒臭い事になりそうだ。

言葉がわからないふりしてたらよかったかもな。

「これから言う事を君の学校の生徒にきちんと理解させる事ができるかね??」

「話の内容も聞いてないのにそんな約束できるかよ。」

「では、話そう。」

そう前置きを置いて、男は話し始めた。

「デイルファリアは3分割される事になった。君達が住んでいる場所^所はイギリスの領地になる。」

……………。

「よって今日よりイギリス法が全てに適応される。」

「ちょっと待てよ。」

俺は話を切った。

「って事は俺達は徴兵に行かなくちゃなんね〜のか??」

イギリスでは戦う技術を持った人間は老若男女関係なく徴兵に行かなければならないはずだ。

「………… イギリス法まで知ってるのか。」

男は多少驚いた様だ。

だからと言って事の重大さが変わるわけでもない。

「敗戦国として当然か…………。」

「………… それを聞いても何とも思わないのか??」

「俺がどうあがいたところで変わらないからな………… 無駄な労力は避けたい。」

「君は………… 何者なんだ??」

「ただの高校生だ。 過大評価すると後で痛い目に合うぜ。 それよりまずは俺達全員を帰せ。」

「もちろん。 準備が必要だしな。」

デイルファリアの正規軍がイギリス軍になるのにその上まだ徴兵するのか…………。

噂通り古代3国は無茶苦茶な法律を作ってやがる。

それよりこの事実を俺が伝えろって言うのか??

ふざけやがって。

勝戦国として通訳ぐらい連れて来やがれ。

「伝えてくれるな??」

「……………」

「お前が言わないと誰も知れないぞ。」

「…………。 わかったよ。」

そう言っただけ俺は部屋を出た。

伝えれば必ず混乱が起きるだろう。

いくら戦闘技術を持っているからって戦争に行く覚悟ができていないわけではない。

逃げ出そうと思えば逃げ出せない事もないが……デイルファリアがなくなった今、古代3国に筆頭する力を持った国があるだろうか。俺1人で考えてても何も始まらないので、とにかく皆に伝える事にした。

1つも嘘偽りなく……現実をそのまま……。

かなりの混乱があった、怪我人さえ出た。

予想していた範囲だったのだから何とか被害を縮小できたと思う。

今は皆、騒ぎ疲れて……シヨックで静かだ。

もちろん何人かは気を強く持っていた。

拓也も順もその中の1人だ。

優華と朋美と綾はかなりシヨックだったようで、今は静かに3人で固まって座っている。

これからどうするかを決めるために、きちんと現状を理解した上で落着いて判断できると思った奴を集める事にした。

これからどうなるかは全くわからないが、なるようになるだろう。

第29話：ティル・グレゴリー

結局集まったのは俺達3人を含めて5人だった。

何かあればこの5人でこの船にいる50人を先導しなければなら
ない。

勿論、逃げ出す事も考えたが結局リスクが大きいわりにメリットが
あまりないので却下となった。

なりゆきにまかせるしかないかな…。

後でわかったんだが、この船に乗っている内のほとんど全員がまず
研修生として軍に入るらしい。

その点では安心だけど…………。

俺はイギリス側の軍に入るのは多少マズい。

どうしたものかな…………。

そろそろ皆に俺の事を言ってもいいか…………それとも…………。
まあ成り行きに任せよう。

運が良かったら早めにこの世界から退場って事になるかもしれない。
そこまで考えたところで声がかかった。

「後どれくらいで着くかわかるか?」

順だった

この頃なんかやたらと俺を頼って来る。

「時間的に考えるとあと2時間ぐらいで着くはず。」

それを聞いて拓也は綾の元へ行く。

マジで、いつからあいづらあんな仲になったんだろうな。

相変わらず拓也と朋美は一緒にいるし…………。

優華は俺の知らない女の子と一緒にいる。

…………ハミられた…………。

「もう少しで着くから降りる準備をさせろ。」

1時間ぐらいたってからフランス語で男が俺に喋りかける。
それから1時間ぐらいで西院学園に着いた。

今から2時間猶予をくれるらしい。

その間にまず家に帰れと言う伝言を伝えた。

グランドには今はもう生徒はいない。

俺は家に帰って、まず風呂に入り、荷物を全部まとめた。

まだ30分もたっていない。

……少し寝る……かな。

……寝過ごした。

集合時間から2時間もたってる。

急いで学校に行ってみると誰もいなかった。

いや……1人だけいた。

「久しぶりだな。漣亮。」

「……ティル・グレゴリー。」

ちなみにこいつは俺の知り合い……元仲間だ。

たしか今は……スペイン軍にいるはずだ。

「ここはイギリス領だぜ??」

「ああそうだ。だからなんだ??イギリスとスペインは同盟国だ。」

「何しに来たんだよ??」

「イギリス軍から連絡が入ってね……漣亮らしき生徒が西院にいるってね。」

「今さら何の用だよ??チームは解散したはずだけど。」

「久しぶりに顔でも拝んでおこうと思ってる……『黒き征裁』と呼ばれた男の顔をね……」

「……。」

「ちなみにお前が一緒に行くはずだった生徒達は今、港にいるだろう。確かイギリス領のテューダに連れて行かれるはずだ。」

「……。」

「安心しろよ。……確かに俺とお前は『あの日』を境に敵になった

が、この情報は嘘じゃない。」

「なるほどね……。他の元チームのメンバーを集めて俺を殺そうとしてる頭はお前か。」

「大丈夫だ。まだ殺しはしないさ。果実は熟した方が旨いんでね。」

「……………」

「それはそうと急がないと船が出るぞ。正門に停めてある俺のバイクを使えよ。」

それを聞いた俺はすでに走り出していた。

今は元チームより大切な事がある。

……………イギリス軍に入れば俺の情報があいつらに知られちまうと思っただけ、もう遅かったか……………。

第30話：過去

港に着くと船が出発する瞬間だった。

ギリギリセーフ。

拓也によると俺を30分ぐらい待たらしいが、テイルが来たのでテイルに任せて先に出たらしい。

「知り合いなのか??」

「ああ……昔……な。」

「また昔ですかあ??」

船に乗って拓也に説明してもらった瞬間に順と綾に言われた。優華には殴られた。

「遅い!!!! かなり心配したんだから!!!!」

と言つて。

「それよりよ……そろそろいいだろ。」

「……………過去か??」

拓也のせいでいきなりシリアスモードに突入した。

船に乗っている西院の生徒が皆、俺の方を向く。

「わかったよ……………これ以上隠すのは無理そうだ。」

そう言つて俺は話し出した。

3年前……この世界には全ての戦争の根元とも言えるトラファリアと言う国があった。

その力は強大で、他の国全てを圧倒した強さを持っていた。

トラファリアの隣にはフェアルリアと言う小さな国があった。

トラファリアはフェアルリアなどいつでも潰せると言う事で、フェアルリアには何も干渉していなかった。

そこで俺は暮らしていた。

デイルファリア生まれだが、親父が優れた軍人だったらしく、フェアルリアにスカウトされたらしい。

もちろんそこに行くまでにいろいろあつたらしいが、俺は知らない。俺は毎日親父にくつついて剣術を習った。

毎日毎日、練習をした。

俺が14歳のある日、親父が殺されたと言う連絡をもらった。母はショックで数カ月後に死んだ。

親戚も何もいなかった俺を親父の同僚が引き取ってくれた。

その後、俺は誰が親父を殺したのかを独自に調べた。

親父を殺したのは、トラファリアの暗殺部隊だった。

俺はその日を境に人を集めた。

弱冠14歳だったにもかかわらず、24人が集まった。

俺を含めた25人で俺は最強の部隊を作る事にした。

まだ14歳だった俺の代わりに実際に指揮をとったのは、当時25歳だったテイル・グレゴリーだった。

俺達は強くなる為に、世界中を旅した。

世界中の犯罪者を相手に俺達は強くなっていた。

俺だけは、強さじゃなく、協力者を探した。

1年後には、俺達はかなり強い部隊だった。

各国からのスカウトが毎日の様に来た。

協力者もかなり得た。

世間では俺達の事を黒いコートを着ていたので『漆黒の死神』と呼んだ。

そして、そのトップである15歳の少年を『黒き征裁』と…………。

そこで俺達は本来の目的を果たす事にした。

元々、トラファリア潰す為に集めたチームだ。

そして、1年前の冬、俺達は作戦を実行した。

トラファリアは完全な王政だ。

王を殺せば軍隊にも迷いが出る。

軍隊が機能しないとなれば、周りの国が一斉にトラファリアを潰そうとするだろう。

これが、俺が立てた作戦の大体の内容だ。

途中まではかなり順調だった。

城に忍び込み、近衛兵を次々と機能停止にした。

そして、負傷者ゼロで王がいる部屋までたどり着いた。

あと少しで親父の仇を討てる。

そう思っただけは扉を開いた。

そこには王と一緒に親父がいた。

俺は訳がわからなくなった。

指揮が執れない。

周りが真っ暗だ……。

気付ば囲まれていた。

「亮……！どうするんだ……！」

テイルの叫び声が聞こえる。

「亮……。お前もこっちに来るんだ。」

親父が言う……。

「亮……。お前も本来はこっちの人間だ。」

親父が言う……。

「

」

何も聞こえない……。。

何も……聞こえない。

第31話：キス??

船の上には沈黙しかなかった。

完全な沈黙。

物音1つしなかった。

「その時の俺は親父が生きていると知っておかしくなっていた。そして、目的であったトラファリア王を目の前にして俺はチームの解散を言い渡したんだ。」

……まだ沈黙は続く……。

「その後は気を失ってわからない。俺が気付いたときには、王の死体があつた。……そして、親父はいなかった。」

……まだ沈黙は続く……。

「こんなもんかな?? なんか聞きたい事あるやつ??」

この気まずさ最上級の空気をなんとかする為に俺は質問を受け付ける事にした。

「ティル・グレゴリーは何でお前の敵になったんだよ??」

「ああ、それを話してなかったな。あいつは元々、古代3国のスパイみたいなんだったんだよ。俺を利用して、トラファリア王を殺したんだよ。それで、何か知らねえけど元チームの奴集めて俺を殺したがつてるんだよ。」

「お前の親父は??」

「さあ?? わからねえ。」

また沈黙ができた。

やっぱ話すんじゃなかったぜ。

「それより『漆黒の死神』と『黒き征裁』って知らねえのか??」

「……知ってるに決まってるだろ。トラファリアが潰れた裏話にほとんど伝説として知ってる。」

拓也がやっと喋った。

なんか一安心。

「じゃあもつとなんかねえの??」ほんとに黒き征裁なの??すごい。』とか言う歓声が上がると思っただけだな。」

「本気で思ってたのか??」

今度は順が喋った。

ついでに睨まれたけど……。

「そろそろ、自分の部屋に戻れ。」

ちょうどいいタイミングでイギリス兵が言った。

今回は徴兵として行くのだからちゃんと部屋もある。

皆がそれぞれに部屋に入って行く。

「漣亮。ちよつと来るんだ。」

って事で俺は呼び出された。

イギリス軍の中佐が大佐か知らないけどそいつに俺の過去が本当なのかを聞かれて、いろいろ喋らされてやっと帰る事ができた。

部屋に着くと、扉の前に優華がいた。

「久しぶりにセリフありのトージョーをした優華ちゃんです」

……………。

「部屋には上坂も安永もいるんでしょ??」

「ああ。たぶん寝てるけどな。」

「ちよつと付き合ってくんない??」

って事で甲板に行った。

「亮ってあの『黒き征裁』だったんだねえ。これでいろいろ説明つくよ。」

「悪いな。黙ってて。」

「いいよ。タダじゃ許さないけど。」

優華は花の咲く様な笑顔を浮かべて俺に寄り添う。

……………なんで優華と2人で喋ってるとラブコメ方面に行っちゃうか

な??

「で、何か用あるんだろ??」

「別に……。ただ喋りたかったのよ。」

「は??何だよそれ??」

「恋する乙女のささやかな希望です。」

「たく……。いつ見ても可愛いんだよ……。」

「……。引くなよ??」

優華の前にいたらどんな男でもそう思っつて。

「亮ってさ、何人彼女いたの??」

「……。またそっち方面に話題が行くのか??」

「だって興味あるもん。」

「……。3人。」

「嘘だ。」

「嘘じゃない。」

「じゃあちゅくは??」

「……。普通女の子がこんな事聞くか??」

「……。そんなに知りたいのか??」

「……。やっぱやめとく。聞いたらブルーになりそう。」

「キスしてやろうか??」

ちなみに下心無しの冗談だけで構成された台詞だぜ。

「やくだ。えっち!!!」

「……。拒否られた。」

「……。やっぱりしよつかな??……キス。」

「……。」

えくと……。絶好のチャンス到来??

「でもなあ。」

「何だよ??」

「亮、今彼女いるでしょ??」

「は??誰がそんな事言ってるんだよ??」

「女の勘です。」

「いねゝぞ?？」

……なんでそんな疑う目を向けるんだよ?？」

「じゃあいないってわかったらしてもらおう」

「わからせなきゃダメなのか?？」

「そう。わかったらキスだけじゃなくてその後もまかせるから」

優華はそう言って走って行った。

……………。

今日からはどうやって分からせるか悩まなきゃなんねえなあ。

第32話：訓練所

えーと、みなさん初めまして、雁原優華です。

今回からちよつと事情があつて亮の代わりに私が『語り部』だっけ??それをする事になりました。

事情つて言うのは、亮だけ訓練生じゃなくていきなり第一線で戦うらしいのです。

正直かなりシヨックです。

あのキス騒動があつた次の日から亮はもうこの訓練所にはいません。あれから2週間ぐらいたつて私達もやつと訓練所での生活に慣れてきました。

学校でやっていた事を派生させた授業ばかりだからけっこう楽です。上坂とか安永なんかいろいろ教官よりできるらしいです。

ちなみに私も朋美も綾もけっこう出来てます。

しかも、この訓練所は設備がかなり充実してるので、平均生活水準よりかなりいい暮らしをしています。

心配事と言えば、お父さんとお母さんの事ぐらいです。

私のお父さんもお母さんも学者っぽい事してたから、戦争に直接行く事はないらしく、新兵器の開発とかしてるらしいです。

以上、現在の近況報告終わり!!

「優華。ご飯行くよ。」

なんと!!そこにグットタイミングで朋美から声がかかりました。

……………なんか語り部って難しいなあ。

「ちよつと待って!!」

あ、ちなみに朋美と綾と私で1つの部屋です。

「今日は何食べましょうかあ。」

こう見えて綾はかなりの食いしんぼうさんです。

「そう言えば明日からテストなんだっけ??」

「らしいわね。噂じゃ靈獣と戦うらしいわよ。」

ちなみに朋美はこの情報を教官室で聞いたらしいです。

霊獣は前に亮と一緒にたおした事あるから結構自信あります。

「どこへ行ってもテストはありますねえ。」

「やだよねえ。不合格とかだったら補修あるのかなあ??」

今日の昼ご飯はスパゲッティにしました。

朋美は私と同じで、綾はパフェも食べてた。

今日は午後から講義がないから食堂で他の女の子達と4時ぐらいまでいろいろ喋りました。

あと2時間ぐらいで晩ご飯じゃんか。

「今日は先にお風呂行く??」

「私は晩ご飯の後がいいですう。」

「私も後がいい!!」

って事で晩ご飯の後に決定。

それまで部屋でトランプしました。

ちなみにお風呂のシーンは教えません。

期待していた方々ごめんなさい。

でもいたって普通のお風呂だったから女性の方ならわかりますよね??

後は特に変わった事もなかったし、普通に寝ました。

第33話：テスト

いきなりですが、今日はテストです!!!

今日を乗り切ったら待っているのは3日間の休暇です。

ちなみに私達は第4トレーニングルームでテストらしいです。

朋美によると、昨日の男子のテストで上坂は最高得点を出したらしいです。

ちなみに安永は3番目。

亮がいたらどれくらいなんだろうなあ?? 私の試験が始まったのは11時ぐらいだった。

私の3人前に綾は終わってたからアドバイスをもらった。

かしこくない霊獣らしいからちよつと頭を使えばすぐに勝てるって言っていました。

私の相手の霊獣は鷹を大きくした感じの霊獣だった。

つてか飛んでるし……。

優華ちゃんちよつと放心状態……。

そんな呑気な事考えてたらいきなり霊力弾を口から出した。避けたところに突っ込んでくる。

しかも翼に霊力を込めてあったから霊力壁がやぶられた。

「……っっ!!」

剣で翼を受けて右足を跳ね上げる。

脇腹をかすったから少しバランスが崩れながら飛び上がろうとするところに今度は左足でキックする。

……… 今度は避けられた。

学習能力あるし……。

頭いいじゃんか、綾のバカ。

綾に怒ってるうちに霊獣は今度は霊力弾を大きくし始めた。飛んでるから剣は届かないからなあ。

まあやろうと思ったら出来るけど。

やっぱりやめて霊力弾を撃った。

かなりのスピードを出したので大きくしている霊力弾に直撃した。
その直後に爆発。

うわぁ。痛そう。

あ、墜落した……。

てかまだ生きてるし……。

もう優華ちゃん容赦しません。

って事で突っ込んだ。

剣を振り下ろすと同時に霊力弾を上に向けて撃つ。

霊獣は目が見えなくなったらしくて、霊力に反応して動いた。

残念ながら私はあなたの目の前にいます。

モロに剣が頭にに直撃した。

奇声を出して霊獣が横たわる。

「雁原優華試験終了。」

アナウンスが鳴ってドアが開いた。

やと終わったぁ。

「お疲れ様ですう。」

「どうだった??」

「飛んできた。」

「鳥型だったのかぁ。」

「それと学習能力あったよ??」

綾に向かって舌を出す。

「私のは学習能力なかったですう。」

相変わらずマイペースだなぁ。

ちなみに3人ともテストに受かりましたぁ。

第34話：電話

今日から待ちに待った3日間の休暇です!!!

1日目の今日は朋美も綾もデートって言ってたから部屋でゆっくりしよっかなあって思ってます。

明日は3人でお買い物って予定。

明後日は何も決まって無いけど……。

朝早くに朋美と綾を送り出したらかなり暇になった。

いいなあ。デート。

ちなみに相手は上坂と安永。

いつのまにか綾と上坂がそういう関係になってました。

こういう時に亮がいたらなあ……。

って思ったら悲しくなるから思考停止。

恋する乙女はツライですねえ。

この気持ちは男性にはわかんないですね。

そう言えば成績のいい人は来週から訓練を終わって、第一線に出るらしい。

私もそう言われた。

正直に言つとやだ。

どうせなら私もお父さんやお母さんみたいに新兵器の開発って方面に行ったらよかったかなあ??

そんな事を考えてたら部屋の電話がなったん。

施設内の番号じゃない……。

「はい、もしもし。イギリス軍訓練所の302号室ですが??」
何気に緊張した。

「優華?? 私よ、朋美。」

「朋美??」

「そ、公衆電話からかけてて。」

「どうしたの??」

「拓也と晩ご飯食べて帰るから綾と先に食べてて。」

「……相変わらずラブラブですねえ。」

もちろん皮肉。

「はいはい。ラブラブですよ。」

なんかスツゴい腹立つなあ。

今からふて寝しよつかない？

そう思ったらまた電話が鳴った。

また朋美？？それとも綾が同じ内容で電話かな？？

「はい、もしもし！！」

自然となんか怒った感じになった。

「もしもし。優華？？何怒ってるんだよ？？」

「へ？？亮？？」

なんと亮だった。

優華ちゃんビツクリ。

「何怒ってるんだよ？？欲求不満か？？」

「う、うるさいなあ。こっちにも事情があるのです。ってか最近ど

うなのよ？？」

ちよつと無理矢理話題を変えてみた。

「絶対調かな？？3日で部隊長になつたし。」

「部隊長？？3日で？？」

どうやら『黒き征裁』は健在らしいです。

「初陣で相手の大将の首とってさ、以外と簡単。」

「普通は簡単じゃないの。」

「優華はどうなんだよ？？」

「私？？私は後1週間ぐらいで第一線に出るらしいよ。」

「1週間か……。ギリギリかな？？」

「？？何が？？」

「他の奴らは？？」

質問無視。

「みんな同じ様なものだよ。1週間後が最速。」

「そっか……。で、今何してるんだよ??」

「朋美と綾は上坂と安永とデートで、私は自分の部屋で留守番。」

「留守番かよ。暇人だなあ。」

「うるさいっ!! 寂しいんだから帰って来るまで付き合ってよ。」

「はいはい。わかったよ。」

それから綾が帰って来た6時半までずっと電話してた。

「優華もデートでしたかあ。」

って突っ込まれた。

今日はとてもいい日でした。

第35話：帰還

昨日は私にとつても朋美にとつても綾にとつてもいい日だったから今日の買い物は3人共かなりご機嫌だった。

ちなみに朋美は夜の10時に帰って来た。

……何してたのよ……。

第一線になると休暇があつても自分のしたい事ができないらしいから今日は今までで最高にはっちゃけようって事でかなり騒いだ。

昼ご飯食べるのとか忘れてたし。

ちなみに今はファミレスで晩ご飯。

「明後日から何の授業するんでしょうかあ??」

「軍の規律とか上下関係とかいろいろあるらしいよ??」

「へえ」。相変わらず朋美はよく知ってるね。」

「私達は女性軍に入るんでしょうかあ??」

「そりあそうでしょ。」

「実力がずば抜けてたら女性軍とか関係ない將軍になれるらしいけど。」

亮が簡単に出世してるからきつと実力重視なんだろうなあ。

「どの辺に配置されるんでしょうかあ??」

「さあ。まだそこまでは分かってないはず。」

「お2人さんは彼氏と離れる心配しないといけないから大変だねえ。」

「

皮肉ってみました。

「優華だつて漣くんいるじゃない。」

「亮はそんなんじゃない……はず。」

「でも、昨日ずっと電話してたみたいじゃないですかあ。」

「……暇だったんだもん。朋美みたいに夜までいちゃいちゃする相手いないからねえ。」

「別にいちゃいちゃしてません!!」

「じゃあ昨日夜遅くまで何してたんですかあ??」

「そ、それは……………」

「そんなん決まってるじゃんか。」

「やっぱりホテルですかあ。」

「そうそう。お淫らしてたの。」

「う、うるさいなあ。別にいいでしょ。」

ついに開き直っちゃいました。

「朋美もやる事やってるんだね。」

「そんなんだったら綾もでしょ??」

「……………いきなり私に振らないで下さいよお。」

「綾もお淫らしてたの!??」

「え…………まあ。はい。」

綾は照れながら言う。

何よお。2人ともそんな事してるの??

こうなりや亮に告っちゃおっかな。

まあ、さすがの2人もそのデート以来デートっぽいのはしないで1週間を過ごした。

1日1日でどんどん緊張感が高まっていく。

明日はまず本部に集まってそれから軍分けするらしいです。
ヤだなあ。

訓練所で過ごす最後の夜に元西院のみなでお別れ会みたいなのをした。

みんなでお菓子食べて、騒いで、これで最後だからなあ。

突然電話が鳴った。

「はい??」

1番近くにいた上坂が出る。

騒ぎ過ぎて電話かな??

「ちよつと聞いてくれ!!」

受話器を置いて上坂が叫ぶ。

真剣な顔をしているからみんな黙った。

「今からここに軍のお偉いさんが来るらしい。」

「今から???もうこの施設にいるのかよ??」

これは安永のセリフ。

「ああ。今、向かったって。」

.....。

.....。

.....。

沈黙が流れる。

その瞬間ドアが勢いよく開いた。

黒いコートを着た男が立っていた。

静寂を破ったのはその男だった。

「イギリス軍本隊大將軍護衛隊長の漣亮だ。」

なんと亮でした。

第36話：『黒き征裁』直属兵

お待たせしました。全国の漣亮ファンみなさん。
お久しぶり。

やっと帰って来ましたよ。

優華の語りだとつまんなかったでしょ？

まあ安心して下さい。

今日からまた俺が語り部です。

って事で漣亮復活！！……みたいな。

「どう言う事だよ？？お偉いさんって亮なのか？？」

再会の喜びなんか味わう暇もなく拓也が突っ込んだ。

「言っただろ？？イギリス軍本隊大將軍護衛隊長って。」

「何なのそれ？？」

「王直属の近衛隊長の將軍版みたいな感じ。」

「軍のトップの護衛って事ですかあ？？」

「そうそれ。綾ちゃんは何分がいいいな。」

「じゃあ何しに来たんだよ？？」

……。

なんか責められてないか？？

「昨日付けで俺は今の地位に就いたんだけど、將軍の護衛隊長って事は俺直属の兵隊がいる訳だ。」

「……………だから？？」

「その兵隊は俺の独断と偏見で決めれるんだけど…………。」

「…………それを俺達で隊を作ろうって事か？？」

「そうそう。いきなり一般兵じゃなくて近衛兵だぜ？？」

それからいくつか質問をされて俺と一緒に来る奴は2時間後に準備して大広間に集まるように言った。

もちろん訓練期間が終わってなくても俺の権限でなんとかすると約束した。

「……亮……。」

「……どうしたんだよ?? 優華??」

「この前電話で言ってたのってこれ??」

「ああ。あそこで言ってたらお前達気い抜いてしっかり訓練しなかったはずだからな。」

「ふん。」

「それより早く準備して来いよ。」

「……行かないっていったらどうする??」

「お前は強制だ。」

「きよ、強制??」

「どっちにしろ拒否るはずがないだろ。」

「ん。なんか亮の計画通りって感じだなあ。」

「計画通りだ。」

「って事でまず1人は確保。」

「まあ全員来ると思うけどな。」

「それから1時間で全員が来た。」

「まあ予定通りだから大して驚きはしなかった。」

「で、今からどっか行くのか??」

「今から本部に向かう。手続きとかいろいろあるからな。」

「本部まで何で行くのよ??」

「飛行機。」

「って事で本部へ直行。」

「亮の奴マジですっげえスピードで出世してるよな。」

「ああ。絶対おかしいぜ、ついこないだまで霊力使えなかったのによ。」

「さすがですねえ。」

「亮のくせに結構すごい。」

とか何だか後ろから聞こえてきたけど無視。
今更俺の凄さに気付いても遅いんだよ。

第37話：初陣

次の日、朝一で部隊登録をしに行った。

もちろん俺は部隊登録なんてしなくてもいいので、イギリス大將軍であられるフェルナンド將軍に報告をしに行った。かなり怒られた。

さすがに自分の護衛が全員訓練生から引っこ抜いて来た奴だってわかったら怒るか……。

最終的には納得させたけど。

大將軍の護衛って言ってもフェルナンドは24時間体制で本部にいるだけだから実際は現場監督みないな役に就くんだけど。って事で今から戦場に向かいます。

拓也達はどうかやら戦場には行かないと思ってたみたいでかなり文句を言われた。

「俺達は最後尾だから。」

って言ったらいくらかまっしになったけど。

ちなみに俺達が行く戦場はラオックスって所。

まだまっしな戦場だ。

何とかって言う名前の將軍2人の部隊が総出してるらしい。

現場に着くなり拓也に俺の部隊の全指揮をまかせた。

「……………そんなにいいのかよ??」

「だって俺は今から全隊の指揮取らなきゃなんねーから。大体今日は初めてなんだし現場の空気とかに慣れとけよ。」

命令って事でって言ったら文句を言わなくなった。

……………やっぱリトップってのはいいなあ。

で、俺が將軍の所に行くのにお決まりの5人が付いて来た。

「だって現場の空気に慣れなきゃいけないじゃん。」

「そうですよあ。見学ですよ。」

「命令違反じゃないしね。」

「やっぱり隊長を見て覚えね〜と。」

「亮の言いなりになってるの糺だし。」

らしい。

.....。

ほつとこう。

「現状を教えてくれ。」

將軍テントに入るなり俺は言った。

「川を挟んで対峙しています。右翼と左翼に2万ずつ。中央に3万を隊列を組んで並ばせています。」

「地形は??」

「こっちの陣の方が2、3メートル高いです。」

「右翼と左翼を1万ずつにしろ。あと中の隊列を曲線状にしといて。」

それを聞いて將軍2人は出て行つた。

「お前らもここじゃなくて戦場見てた方がいいぜ。」

「.....。今、指示した陣型の意味がわかんね〜んだけど。」

当たり前だ。

今日戦場に立つたばつかの奴にわかれば作戦もくそもないだろ。

「配置し終わりました。」

「1回目の合図で陣型を崩さずに中央の歩兵を2万、2回目で左右の騎馬隊全隊、3回目でもた中央の2万を前進。詳細は前の打ち合わせ通りだ。」

「はい。.....しかし、本当にあんな作戦が通用するのでしょうか?」

「無茶苦茶だろ??」

「はい.....。」

「だからこそ.....だ。」

それから10分ぐらいすると敵が動きだした。

敵の陣型は5万の歩兵が前、3万の騎馬隊が後ろだ。

まずは歩兵が3万弱、次に騎馬隊が1万弱動き出した。

今日が初陣の俺の部隊はかなりソワソワしてる。

敵がどんどん近付いて来る。

200メートル……150メートル……100メートル……。

「今だ!!」

味方の歩兵が合図と共に動き出す。

敵の方が動き出したばかりの味方より勢いがある。

敵が次第にこっちの陣型である曲線に合う形になって来る。

「2回目。」

そこで騎馬隊が出る。

騎馬隊は敵を無視してそのまま真っ直ぐ走り抜ける。

「お、おい!!! 敵を通り越したぞ!!!」

順がたまらず声を上げた。

無視……。

敵の最終ラインまで突っ切った騎馬隊はそこで方向を変えて合流する。

「3回目。」

また歩兵2万が前進する。

「拓也。全員に馬が用意してあるから準備させといてくれ。」

「出るのかよ!？」

そう言いながら拓也を始め、5人は出ていく。

ちなみに今の状況は味方が敵を囲んだ状態になっている。

ちなみに本陣を守る兵がかなり少ないし、兵隊を移動させ過ぎてる。常識的に考えるとありえない作戦だ。

まあだからこそ……だけどな。

もちろん俺の作戦通りに進んでいて、ラオックス軍はかなり動揺してるらしい。

護衛軍が出る必要は全く無いんだけど、見てるだけじゃ緊張感を感じれるはずがないからちよっとカマかけてみただけ。

って事で我が部隊の初陣はかなり楽勝で終わった。

まあ俺がいる限り誰が来ようと余裕だけどな。

第38話：黒征学園

それから2ヶ月で俺達はラオックスを全域制圧した。
4回の内2回だけ護衛隊は実際に戦った。

その2回で拓也と順は圧倒的なコンビプレーを見せた。

この2人は違う部隊に入れた方がいいかもしれない。

そうすればかなりのスピードで出世するだろう。

すぐに俺に追い付いてくるはずだ。

……… なんか不満。

あの2人が抜けたらだいたいダメージがでかいから手放すつもりはないけど一応言ってみるか。

「俺は今に不満がないから別にいい。」

「俺も。不満出てきたら言うさ。」

らしい。

よかった、よかった。

正直、『元チーム』に対応できるだけの力を持った『チーム』として独立するつもりだ。

あるいはイギリス軍のトップに立つか……。

まあそれじゃあ時間がかかりすぎる……。

それから1ヶ月後に俺達はツールユーザに遠征する事になった。

目的は人材の採掘。

ツールユーザを中心としたガンデンス大陸はこの間イギリスの傘下に入ったばかりで優秀な人材がいるかもしれないらしい。

人材採掘と言っても結構難しい作業だから俺はてっとり早く学校を作る事にした。

優秀な成績で卒業すればキャリアとしてイギリス軍本隊に直接配属

されると言う名目の元にかなりの人数が集まった。

学校の名前は黒征学園。

もちろん『黒き征裁』からとった。

黒征学園は拓也に任せて俺は優華と2人で学校に来れなくて埋もれている人材を採掘しているところだ。

なぜ優華と2人かと言うと、……まあ学園の講師に人数を割かないといけなかったし、人の方が行動力が上がるからだ……と言う事にしといてほしい。

まあ他にも理由が無かった訳じゃないけど……。とにかく2人だったので、2ヶ月でガーデンズの半分を調べ終わった。

何人かを黒征学園に行かせる事にも成功した。

「疲れたあゝ。もうだめ。亮が私を奴隷同然に使うからへとへと。ちなみに今は休む為にホテルの一室にいる。」

「人聞きの悪い事言うな。今日は大して何もしてないだろ。」

「……前から思ってたんだけどさ。」

「何だよ??」

「このごろ亮、冷たくない??」

「……別に変わってないだろ??」

「そんな事ない!!絶対冷たくなった。冷たいつてか冷酷って感じ。」

「まあ『黒き征裁』だった頃は自分でも俺って冷酷だなんて思ったけどな。」

「そんな事ねゝよ。普通だ。」

「……ま、いいけど。それより今日は一緒の部屋なの??」

「……空き部屋が無かったんだぜ??勘違いしないこと。」

「そんな事言っちゃってさゝ。」

「じゃあするか??」

「何を??」

「今、優華が考えてた事。」

「……まだ彼女いないって証明されてないからやだ。」
真剣な顔して答えやがった。

「……。まだかよ。」

「早くしたいんだったら証明しなさい。」

「どうやって証明すればいいんだよ?。」

「自分で考えてないと意味ないの。」

「……なんか疲れるな……。」

実際、証明できてないから俺と優華の間にはまだ何もなし……は
ず。

そんな呑気な事考えてたら電話が鳴った。

「はい??漣です。」

優華が勝手に出やがった。

「……いろいろなややこしくなるからやめろよ。」

「亮。上坂。」

拓也かよ。

「もしもし??何だよ??。」

「亮か!??ちよつとマズい事になった。今すぐ帰って来てくれ。」

「……って事で今すぐ帰らなきゃならねえ。」

優華と2人でイチヤラブな夜を過ごす事はできなくなった。

「……残念だ……なんつって。」

第39話：転機

黒征学園に着くなり俺は拓也がいる校長室へ行った。

「何があつたんだよ？」

「本部から電話があつたんだよ。少しマズい報告だ。」

「……こんな時に何してるんだよ。」

なんか重大な事決めるんだつたら俺は呼ばれるはずだ。

「イギリスが決めたんじゃないんだよ。フランスとスペインが古代3国同盟を破棄して新しい同盟を作るらしい。」

「は？？……訳わかんねえよ。」

「まあイギリスはかなり領土手に入れたからなあ。フランスとスペインが危機感感じたんだろう。」

いくらイギリスでもフランスとスペインに敵対されれば終わりか……。

「……そろそろか……。」

「優華。全員に招集をかけてくれ。」

「拓也。今日から3日間休校だ。全生徒に連絡してくれ。」

2人はそれを聞くなり部屋を出ていた。

俺は今から本部に電話でもするか……もちろんイギリス軍を抜けるためだ。

もちろん皆にはもしもの場合イギリス軍を抜けると言っている。

黒征学園は違う奴に任せるしかない。

もちろん候補も決めてある。

「……正直こうなる事はわかっていたけど思っていたよりかなり早かった。」

予想外……いや、予定外か……。

「招集したよ。」

優華が帰って来た。

「できる限り説明しててくれ。」

「ん。」

……ん。って何だよ??

それから電話をし終わって、後を任せる人材もきちんと確保した。皆が集まっている場所に行くのと拓也もいた。

って事は説明しなくて済むのか……よかったよかった。

黒征学園も大丈夫だし、後は自分達の事がそろそろ……。

「航空機ならもう用意してあるぜ。」

「サンキュ。順。」

あとは目的地か、フランス、スペイン領土はもつての他だし、イギリス領土もマズいよな。

結局、皆で相談した結果古代3国の影響が全くないワイクランドへ行く事にした。

ちなみに今は飛行機の中。

操縦は順と拓也がやっているはずだ。

「ワイクランドってどんなところなんですかあ??」

「知らない。聞いた事しかないもん。」

「じゃあ漣くんに聞こう。」

って事で女の子3人が聞きに来た。

「世界のど真ん中だよ。」

「??」

端的に答えたら3人共?マーク浮かべやがった。

「この星のど真ん中なんだよ。」

「人は住んでるの??」

「当たり前だろ。」

「他と何も変わらないの??」

「ああ。靈力でできたでつかい洞窟があるらしいけど。」

「何ですかあ??それ。」

「世界の靈力の源がその洞窟の奥にあるらしいぜ。それを壊せばこの世から靈力がなくなるってさ。」

「うっそ!!じゃあ壊しちゃえば戦争なくなっていくんじゃない?

？」

「その靈力の源に行くまでが大変なんだよ。」

なるほど……って3人で頷いたから納得したんだろう。

正直1番手っ取り早いのがその洞窟壊す事なんだけども……。

今の俺達じゃ無理だ。

第40話：決意

ワイクランドには俺の昔からの知人の高波雄輔がいる。

だからワイクランドでの暮らしは全部雄輔にまかせている。

ちなみに雄輔は情報屋だ。

昔、ほとんどの情報は雄輔を通して賄っていた。

もちろん最近も雄輔に情報をもらっていたけど。

「ったく……。なんでいきなり来るんだよ。」

「いいだろ。我慢しろって。」って事で雄輔の家に居候。

こいつはかなり金を持ってて家も広すぎるから俺達全員を泊めても大丈夫だろう。

もちろんワイクランドではのぼのしてる間にも戦争は進行してて、

イギリスがスペインとフランスに攻められてかなりヤバいらしい（雄輔によると）。

それと、『元チーム』が動き出したらしい。

全員が所属していた軍を止めている。

俺達もぼくっとしてる場合じゃなくなってきたかな？？

…… ったく……。めんどくせえなあ。

こうなりやあの洞窟に行ってみるかな。

霊力がなくなれば戦争の規模も小さくなるし、元チームとも決着が付きやすくなるだろう。

しかもヒーローになれるじゃん。

「例の洞窟ってどこにあるんだよ？？」

「…………… 何で？？」

「行きたいから場所を知りたいんだよ。」

「行く！？それは辞めとけよ。」

「何でだよ？？」

「死ぬぞ。」

「死なねえよ。」

ちなみに根拠は何もないけどな。

死んだら死んだで別にかまわないし。

「……行つて何するんだよ??」

「霊力の源を潰す。」

「霊力源をか!?!いくらお前でもそれは……。」

「いいから教えるよ情報屋!!金がいるんだつたらいくらでも出す。」

「

「……ワイクランドの北にあるタスラマ山脈にある。」

「サンキュ。たぶんこれがお前から教えてもらつ最後の情報だ。」

「亮……。」

「俺がいなくなつてもあいつらの事よろしく頼むわ。」

そう言つて俺は部屋を出た。

きつと『元チーム』も俺の行動を読んだ上で来るだろう。

思つてたより早く事が進んでる。

雄輔の部屋を出た足でそのまま拓也と順がいる部屋に向かった。

「どうしたんだよ??恋の相談か??」

「ああ。かなり無理っぽい恋だ。」

「で、本当は何なんだよ??」

相変わらず拓也は冗談に入つてこない。

「ちよつとな……。決めた事があるから皆に言つ前にお前達に言っ

ておこうかなつて。」

「何だよ??何を決めたんだ??」

「あのな……。」

「ちよつと待てよ。」

話そつとした所を拓也に止められた。

「すつげえ大事な事なんだろ??じゃあ俺は皆と一緒に聞く事にする。」

「えつ??じゃあ俺もそうする。」

「……何だよ2人して。」

「わかつたよ。じゃあ今から皆を集めるから手伝つてくれ。」

って事で皆を集めた。
どう言っ反応を示すかな……。

第41話：洞窟へ

たぶん話をしたところでここに残るって言うやつはいないはずだ。付いてくるって言うだろう。

それをどうやって抑え込むか……………。

言わなきゃ1番楽なんだけどな。

さすがにそこまで酷くない。

とにかく言うって決めたんだからはっきり言った。

……………予想通りの結果だった。

「絶好に付いていく!!!」

「1人で行くとかずるいんだよ!!!」

ずるいって……………別にいい事しに行く訳じゃねえんだからよ。

「1人じゃ行かせねえからな。」

「力ずくでも付いて行きますう。」

力ずくでも……………か。

「……………はつきり言うけどな、お前らが付いて来ても邪魔なんだよ。」

「そんなに冷たく当たられても付いて行きます。」

……………一瞬で粉碎された。

「わかったよ。じゃあ付いて来いよ。」

って事で皆来る事になった。

洞窟までは雄輔が送ってくれるらしい。

「いろいろ悪いな。」

「何言ってるんだよ。あの日、お前に惚れ込んで一生協力するって決めたんだからよ。」

「……………そうか……………。それとこの前言った事よろしく頼むぜ。」

「……………ああ。」

洞窟に到着するなり皆は我先にと飛行船を降りたが洞窟に入っていく奴はいなかった。

「よし。じゃあここでお別れかな??」

「は??何言ってるんだよ??」

「だからお別れだって言ってるんだよ。お前達はここからは来るな。」
「こう言った瞬間抗議の声が上がりだす。」

「お前達には頼みたいことがあるんだよ!!!」

「……………」

「俺が霊力源を壊せばこの世界は少しずつ平和になるはずだ。そこで、お前達に事後処理を頼みたいんだ。」

「……………事後……………処理??」

「ああ。戦争の締結、新政府の構築、そんな事を頼みたいんだよ。」

「……………」

「だからここでお別れだ。」

「……………ちよつと待てよ。そんなもん自分でしろよ。めんどくさい事ばつか押し付けんなよ!!!」

拓也が叫ぶ所は初めて見た。

「前に言わなかったか??俺はこの世界が大嫌いなんだよ。」

「だから何だよ。」

「もうそろそろ退場したいんだよ。でも、ただ退場するだけじゃこの世界に負けた事になるから最後にでっけえ爆弾落として行こうと思ってるな。」

「……………」

「し、死ぬ気……………なの??」

俺がこの話をし出してから初めて優華が喋った。

「かなりの規模の霊力が爆発するんだぜ??助からねえよ。」

「そ、そんな……………」

「……………」

「たく……………さつきからかなり3点リーダーが多いな。」

「優華……………」

「……………はい。」

「やっと付き合っていないって証明する方法見つけたぜ??」

「……………どうするの??」

「付き合ってくれ。」

「へ??」

「お前と付き合えば証明した事になるだろ??」

優華は黙って頷いた。

俺は優華のそばへ歩み寄る。

優華の形のいい顎を持って俺の方を向かす。

優華との距離がどんどん短くなって行く。

俺は……………。

「付き合っていないって証明したらキスする約束だったろ??」

「……………うん。」

「これで思い残す事はねえよ。」

そう言って歩き出そうとした。

「待ってよ!!」

優華が俺の腕をとる。

「何よ!! 死に行く直前に告白したりキスしたり!!!! 亮は死ぬかもしれないからいいけど私はどうしたらいいのよ!!!!」

「……………。」

「それに……………約束した時キスの後も任せるって言ったでしょ!!!! まだ約束守ってない!!!!」

……………泣くなよ……………。

辛くなるだろ。

……………だから泣くなって。

「……………優華……………。」

「だから……………だからまだ死ぬには早いの!!!! 絶対生きて帰って来て!!!!」

「……………。」

「……………」

「……………わかったよ。」

優華が泣いたままこっちを見る。

「約束……………だからね。」

「ああ。必ず生きて帰って来る。」

「うん。」

今度こそ洞窟に入ろうとした。

ティル・グレゴリーがいた。

第42話：別れ（前書き）

『黒き征裁』は第42話を持ちまして終了です。

今まで御愛読ありがとうございました。

これからもよろしく願います。

次の『白い暗殺者』（仮）は黒き征裁の10年後の話となります。

『白い暗殺者』で『黒き征裁』で残った謎とかも明かされるはずですよ。

よりよい作品にするように努力しますので最後までよろしく願います。

第42話：別れ

テイル・グレゴリーは突然そこに現れた。

グレゴリーだけじゃなく、ほかの『元チーム』の人達も。

さすがに亮もビックリしたみたい。

ここで、『元チーム』と戦って、亮が怪我すればまだお別れなんてしなくてもいいかもしれない。

「よお。久しぶりだな。」

こんな時なのに亮は当たり前のように声を掛ける。

「間に合って良かったよ。『征裁』がこの洞窟に入る前でね。」

「何か用か?? 今から俺はひと仕事しようと思ってるんだけどよ。」

「よく言っぜ『黒色』。」

皆それぞれ亮の事を呼ぶ呼称が違う。

「殺しに来たって言ったらどうする??」

グレゴリーが言った瞬間に私達は戦闘体勢に入る。

「そりゃまあ、相手するしかないだろ。」

「ふつ……相変わらずですね『悪夢さん』。」

悪夢??

「その名前で呼ぶなって。あの呼び名あんまり好きじゃねえんだよ。」

「いいじゃねえか。俺は好きだぜ『悪夢の再来』って呼び名。」

……そんな風に呼ばれてた事もあったんだ……。
まだまだ知らない事多い……。

「で、マジで何しに来たんだよ??」

「……俺達はお前を殺す前に少しでも殺しやすくするように靈力を無くそうと思ったんだ。」

「ふん。靈力が無くなれば俺の方が有利だと思うけどな。」

「……そして、この洞窟に来る前に雄輔から連絡があったんだ。」

「何!?? てめゝ裏切ったのか!??」

「……………わざとらしい切れかたをすんな。」

「……………」

静かになった。

「お前を助けてくれないかってな。」

「……………で??」

「もちろん俺達はお前を殺したい。」

「……………で??」

「でも今回は利害一致しているし、正直俺達だけじゃ余裕がない。」

「……………で??」

「霊力源を潰すまでの間ならお前と協力してもいい。」

「へえ。そ、ご苦労様。」

「……………」

え……………と……………何??この状況??

「雄輔。」

「何だよ??」

「俺がこいつらと組むと思ったのか??」

「……………ああ。」

「冗談じゃね。よ。こんな雑魚。いるだけで邪魔だ。」

「つ……………!!『再来』!!てめえ!!」

怒って動いた人をグレゴリーが止める。

「雑魚……………か……………」

「ああ。邪魔だ。消えろ。」

……………亮ってこんなキヤラだっけ……………。

なんか怖い……………。

「それは無理ですね『悪夢さん』。」

「ああ??何だよ??」

「『征裁』1人より俺達全員の方が強いさ。」

「はあ??真剣に言ってるのか??何ならココで試すか??てめえらごとき格下が何人いようと関係ないんだよ。」

「亮……………もつやめとけて。あいつらにそれは意味ないぞ。」

……えっと…… 1人で行くために雑魚とか言ってたって事……かな
??

「悪いけど行かせてもらうぞ。」

「……………霊力源を潰すまでだぜ。」

「ああ。一時的だ。」

『暗黒の死神』再結成??

「痛っ!!」

殴られた。

「何すんのよ!？」

「帰ってきたらちゃんと癒してくれよ??」

「わかってるわよ。」

その会話を最後に『漆黒の死神』は洞窟へ入って行った。

それから3日間たって霊力が使えなくなった。

……………それからさらに3日間、亮は帰って来ない。

それから1週間たってみんなで洞窟を探しに行っただけど誰の姿もなかった。

……………亮……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7984a/>

黒き征裁

2010年10月11日22時47分発行